

平成八年度県営農業基盤整備事業地域

埋蔵文化財発掘調査報告書

度会郡度会町 登り遺跡
度会郡度会町 野田遺跡・研山遺跡
名賀郡青山町 西山遺跡・中出向遺跡・間所遺跡

1997年3月

三重県埋蔵文化財センター

序 文

それぞれの地域に埋もれてきた埋蔵文化財は、多くの先人たちが営々と築いてきた歴史の断面を今に伝えるものであり、それぞれの地域社会の特色を形のある資料から類推し、物語るうえで欠くことのできない貴重な文化遺産です。

と同時に、それらの文化財は通常直接には目に触れることがないため、ややもすると見落としてしまいがちであり、しかも一旦破壊されてしまうと、もう二度ともとの形に復元することが不可能になってしまいます。したがって、そういう不可逆的な文化財を慎重に保護し、かつ後世に何らかの形で伝え、活用していくことは、現代に生きるわれわれの務めです。

しかしながら、地域住民の健康で安全な住みよい生活環境の創造や地域社会・経済の発展はこれを著しく阻害してはならず、その意味でも各種の公共事業は必要不可欠のものです。そのため、三重県埋蔵文化財センターでは、当該開発行為に伴う現状変更に関して、埋蔵文化財の適切な保護のあり方について、各関係部局との調整・協議を密にしながら検討し、現状保存が困難な遺跡の一定部分について緊急発掘調査を実施し、その記録保存に努めてきているところです。

ここに報告する三件六遺跡については、いずれも平成八年度農業基盤整備事業（県営圃場整備）に伴う事前の緊急発掘調査成果の一部です。既に消滅した遺跡の記録情報を将来に生かすために本報告が活用されることを切に望みます。最後になりましたが、ご協力を戴きました関係機関・各位に深甚の謝意を申し上げます。

平成9（1997）年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 奥村敏夫

例 言

1. 本書は、平成8年度三重県農業基盤整備事業地内における事前の緊急発掘調査のうち、下記6遺跡の調査結果をまとめ、合冊本にしたものである。
度会郡度会町 登り遺跡、野田遺跡、研山遺跡
名賀郡青山町 西山遺跡、中出向遺跡、間所遺跡
2. 当該調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を受けて三重県教育委員会が、他は三重県農林水産部と地元市町村が負担した。
3. 当該調査及び室内整理の体制は下記の通りである。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課（調査第一係）
整理担当 三重県埋蔵文化財センター 調査第一課及び管理指導課
4. 調査に際し、三重県農林水産部農地整備課、伊勢及び上野農林事務所、小川郷上・中川地区土地改良区、羽根地区土地改良区、度会町及び青山町教育委員会等の関係諸機関・各位にご協力を戴いた。
5. 本書で使用の方位は真北を用いた。磁針方位は、各遺跡とも西偏6度20分（平成元年、国土地理院による）である。
6. 本書で用いた遺構表示記号は下記のとおりである。
SB：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝 SE：井戸 SX：墓
Pit：柱穴 SZ：不明遺構
7. 本書で報告した発掘調査記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
8. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	(前川嘉宏)	1
II 登り遺跡	(西村美幸)	
1 位置と環境		2
2 層序と遺構		4
3 遺 物		9
4 調査のまとめ		13
III 野田遺跡・研山遺跡	(越賀弘幸・木野本和之)	
1 位置と環境		16
2 野田遺跡		17
3 研山遺跡		24
4 結 語		26
IV 西山遺跡・中出向遺跡・間所遺跡	(筒井正明)	
1 位置と環境		32
2 西山遺跡		35
3 中出向遺跡		46
4 間所遺跡		51

図 版 目 次

II 登り遺跡

第 1 図	遺跡位置図 1 : 100,000	2
第 2 図	遺跡地形図 1 : 5,000	3
第 3 図	調査区位置図 1 : 2,000	3
第 4 図	遺構平面図 1 : 200、調査区土層断面図 1 : 100	5
第 5 図	SB5、SB30 平面図・断面図 1 : 100	6
第 6 図	SZ14 石列、SK23、SK2・3 平面図・断面図・側面図 1 : 40	7
第 7 図	SZ13、SZ14、SK15、SK16、SK23、SB29 平面図・断面図 1 : 40	8
第 8 図	出土遺物実測図 1 1 : 4	11
第 9 図	出土遺物実測図 2 1 : 4	12
写真図版 1	A地区主要遺構、B地区全体	14
写真図版 2	SZ14・SK16、SK2・SK3	15

III 野田遺跡・研山遺跡

第 1 図	遺跡位置図 1 : 50,000	16
第 2 図	遺跡地形図 1 : 5,000	17
第 3 図	野田遺跡調査区位置図 1 : 2,000	18
第 4 図	研山遺跡調査区位置図 1 : 2,000	19
第 5 図	野田遺跡遺構平面図 1 : 200	19
第 6 図	野田遺跡掘立柱建物群平面図 1 : 100	21
第 7 図	野田遺跡 SK9~11・SK27 平面図・土層断面図 1 : 40 / SK28 礎出土状況図 1 : 20	22
第 8 図	野田遺跡出土遺物 1 : 4	23
第 9 図	研山遺跡遺構平面図 1 : 200 / SK3 遺物出土状況図 1 : 20 / SK39 平面図・土層断面図 1 : 40	25
第 10 図	研山遺跡出土遺物 17・18 は 1 : 16、その他は 1 : 4	26
写真図版 1	野田遺跡 調査後全景、SK10	28
写真図版 2	野田遺跡 SK28 礎群検出状況、C-7 グリッド Pit1 遺物出土状況	29
写真図版 3	研山遺跡 B地区東西トレンチ全景、B地区南北トレンチ全景	30
写真図版 4	研山遺跡 SK3 遺物出土状況、SK14 埋壘底部出土状況、SK39 完掘後全景	31

IV 西山遺跡・中出向遺跡・間所遺跡

第 1 図	遺跡位置図 1 : 50,000	32
第 2 図	遺跡地形図 1 : 5,000	33
第 3 図	西山遺跡 調査区位置図 1 : 2,000	34
第 4 図	西山遺跡 遺構平面図 1 : 200	35
第 5 図	西山遺跡 土層断面図 1 : 100	36
第 6 図	西山遺跡 遺構実測図 1 1 : 100 SB21・28	37
第 7 図	西山遺跡 遺構実測図 2 1 : 100 SB22・23	38
第 8 図	西山遺跡 遺構実測図 3 1 : 100 SB24	39
第 9 図	西山遺跡 遺構実測図 4 1 : 100 SB25	40
第 10 図	西山遺跡 遺構実測図 5 1 : 100 SB26	41
第 11 図	西山遺跡 遺構実測図 6 1 : 100 SB27・SA29	42
第 12 図	西山遺跡 遺物実測図 1 : 4	45
第 13 図	中出向遺跡 遺跡地形図 1 : 5,000	46
第 14 図	中出向遺跡 調査区位置図 1 : 1,000	47
第 15 図	中出向遺跡 遺構平面図 1 : 200	48
第 16 図	中出向遺跡 SB10・SA11 遺構実測図 1 : 100	49
第 17 図	中出向 26 号墳想定図 1 : 400	49
第 18 図	中出向 26 号墳周溝土層図 1 : 100	49
第 19 図	中出向遺跡・中出向 26 号墳出土遺物実測図 1 : 4	50
第 20 図	間所遺跡 遺跡地形図 1 : 5,000	51
第 21 図	間所遺跡 トレンチ設定図 1 : 1,000	51
写真図版 1	西山遺跡 調査前風景、調査区全景	52
写真図版 2	西山遺跡 調査区西部、調査区東部	53
写真図版 3	中出向遺跡 調査前風景、調査区全景	54

I 前 言

1 調査に至る経緯（概要）

平成8年度の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査の一般的な経緯については、本年度の三重県埋蔵文化財調査報告146-1-1『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』（付表「平成8年度農林水産部関係開発事業地内遺跡一覧表」も参照されたい）において詳述しているので、ここでは重複を避けて、本書収録遺跡の試掘調査等の概要を、以下に述べておきたい。

度会郡度会町 登り遺跡（旧称下り遺跡）

文化財保護法関係文書番号：平成8年12月10日付け教文第2535号。当該遺跡は、農林水産部農村振興課の中山間地域総合整備事業（小川郷上地区）に伴う事前調査によって確認された新発見の埋蔵文化財包蔵地である。

試掘調査は平成8年11月7日に実施した。対象となる一ノ瀬川右岸の河岸段丘上の水田地帯（約1,500㎡）に、計4箇所の試掘坑を設定して行なった。その結果、試掘坑No.1、2、3において、溝および柱穴などの遺構が確認され、遺物としては土師器皿および焙烙などが出土した。約1,000㎡の範囲に同等の遺構・遺物が包蔵されていると推測された。現地表面から遺構検出面までの深さは20～25cmであった。

この結果を踏まえて協議調整を図った結果、600㎡について、平成8年12月3日から同12月26日までの間、現地での本調査を実施した。その結果、16世紀末ごろの掘建柱建物や井戸、土坑数基などが検出され、土師器鍋・皿のほか、碗・皿・甕などの陶器類、石製硯などが出土し、少なくとも近世初頭ころには人家、集落のあったことが確認された。

平成8年12月23日に現地説明会を開催し、地域住民を中心に100名のギャラリーが訪れ熱心に耳を傾けた。

度会郡度会町 野田遺跡・研山遺跡

文化財保護法関係文書番号：平成8年9月13日付け教文第2489号。農地整備課の県営圃場整備事業（中川地区）に伴う事前の緊急発掘調査である。

試掘調査は、平成8年2月5、6日の両日にわたり実施した。宮川中流域左岸の河岸段丘面に位置する水田地帯に、計310㎡、62箇所の試掘坑を設定した結果、土坑No.15、16、21、25、28、35、36、37では土坑及び柱穴が検出され、土師器甕・皿、青磁碗、山茶碗などが出土した。これによって、事業予定地内には野田遺跡約6,000㎡、研山遺跡約5,000㎡の存在が明らかになり、設計変更等の協議を経て併せて

1,000㎡の範囲について本調査を実施することになった。

発掘調査は、同年10月15日から11月26日まで実施した。野田遺跡では鎌倉時代の溝、中世末期の掘建柱建物群、土坑などを、また研山遺跡では鎌倉時代の土坑、中世末期の柱列などを検出。古代末から中世末にわたる土師器、陶器類などが出土した。近隣の中世城館長原城に関連する集落の存在が予想された。11月16日に実施した現地説明会には地元住民を中心に40名が参加して行なわれた。

名賀郡青山町 間所遺跡・西山遺跡・西出向遺跡

文化財保護法関係文書番号：平成8年11月15日付け教文第2362号。三遺跡とも農村整備課による圃場整備事業（羽根地区）に伴う事前の緊急発掘調査である。

間所・中出向両遺跡の試掘調査は、県道松阪青山線関連の東出向遺跡ほか5遺跡と一連の調査として、同年1月22日から2月5日・2月21日の間に実施した。前者は間処北古墳群の北麓に位置し、古墳の石室を破壊して水田にしたとの伝承があった。後者では、試掘坑No.25で柱穴を検出し、土師器・瓦器・陶器片などが出土した。また、西山遺跡では、同年10月16・17日の両日、赤田地区に7箇所（56㎡）、西山地区に23箇所（184㎡）の試掘坑を設定して実施した。赤田地区には遺構がなく、西山地区の試掘坑No.10・11・22で柱穴と土坑を検出し、鎌倉時代の土師器片が出土した。これらの結果、間所・中出向遺跡では各250㎡、西山遺跡は2,000㎡、併せて2,500㎡を要調査対象範囲として協議調整をおこなった。

本調査は、西山遺跡740mm²を同年11月5日から12月9日まで、間所遺跡60㎡、中出向遺跡250㎡計310㎡を同年12月3日から同27日までの二期に分けて実施した。

調査の結果、西山遺跡では12世紀から13世紀を中心とする掘建柱建物群とロクロ土師器・瓦器碗などが出土した。また、間所遺跡からは瓦器破片（中世）が出土したものの、明確な遺構は何も検出されなかった。中出向遺跡では、古墳の周溝跡のほか、中世の掘建柱建物や柵列、溝などが検出され、ロクロ土師器杯・皿や瓦器碗などが出土した。

11月28日に西山遺跡の現地説明会を開催し、地元住民30名が熱心に説明に聞き入っていた。

（前川嘉宏）

Ⅱ 度会郡度会町 登り遺跡

1 位置と環境

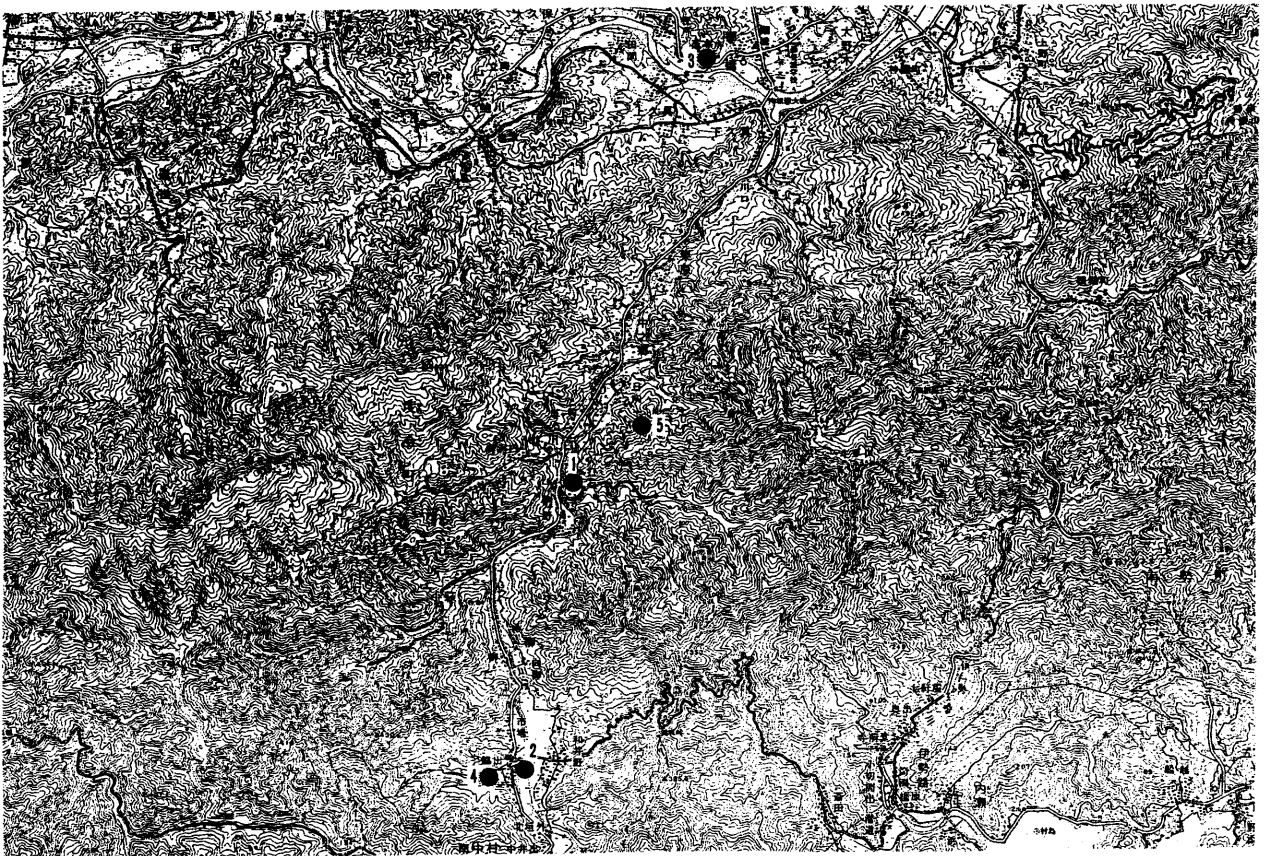
登り遺跡(1)は、南伊勢地方を流れ伊勢湾に注ぐ宮川の支流である一之瀬川とそれに注ぎ込む小河川である彦山川との合流点の段丘上に位置する遺跡である。彦山川の上流には、三重県の天然記念物に指定されている「火打石」があり、地名の由来となっている。

一之瀬川は、野見坂や鴻坂を越えて南勢方面へ、宮川を通じて大湊へ、陸路で田丸方面へと通じ、当地方の交通に重要な役目を果たした。一之瀬川流域には、河岸段丘に沿って宮川との分岐点から川口、栗原、中之郷、日向、五ヶ町、火打石、駒ヶ野、和井野、脇出、南中村といった小規模な集落が連なっている。火打石の奥に位置する駒ヶ野は、一之瀬川の川港があり、江戸時代には田丸藩佐八方の駒ヶ野御仕入方役所が置かれ、荷物の集積地としてにぎわった。これらの集落からは、皇學

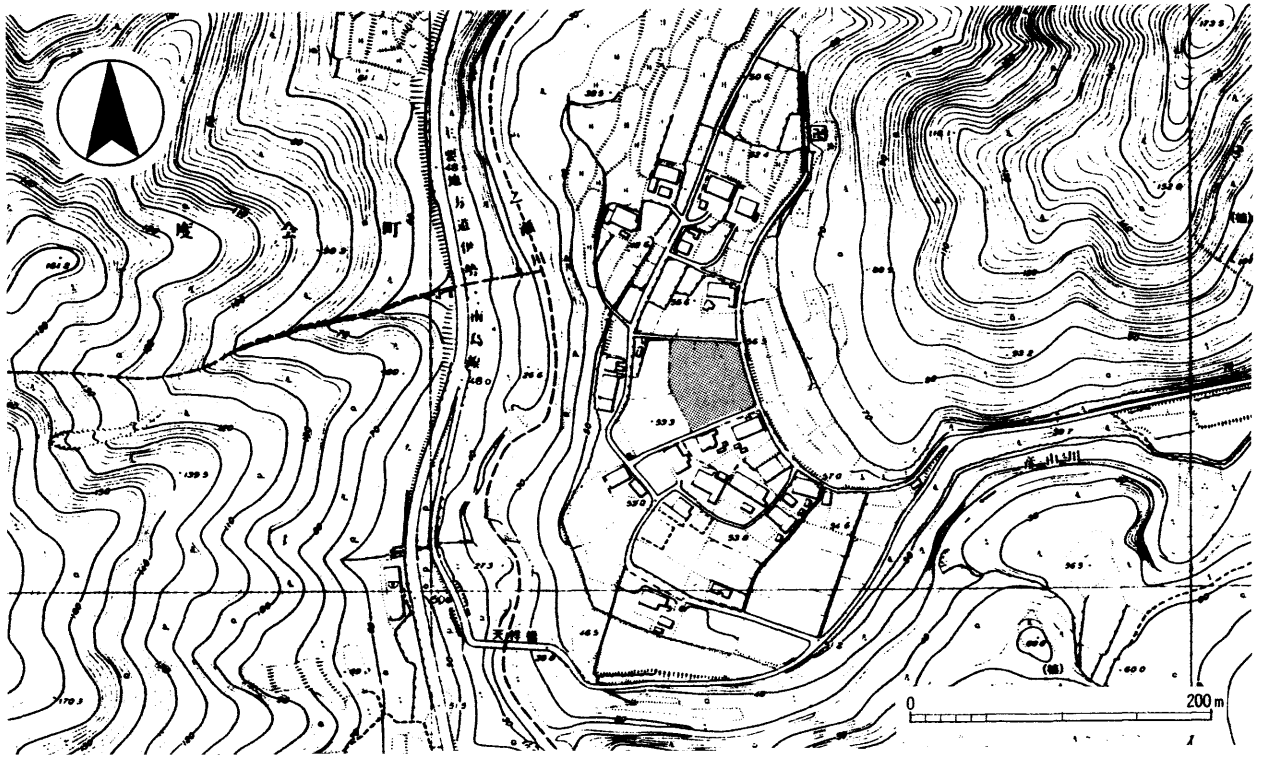
館大学の詳細な分布調査により縄文時代から近世にかけての遺物が採集されている。また、脇出の一之瀬城(2)は、愛州氏の居城で、南北朝期には宗良親王を擁立した南朝の拠点として、宮川沿い棚橋にあり醍醐三宝院門跡の配下となって北朝の拠点となっていた蓮華寺(このころ名称を法楽寺と改めている)と激しく抗争を行ったことが伝えられている。この時期には、一之瀬城と一体のものと考えられる青木城(3)、日向の馬場城(4)、などがあり、当時の戦闘の様子を伝えている。また、小川郷には神鳳抄で「小河御園」とされた鮎や柑子を納めた御園が想定されている。

[参向文献]

- ・度会町史編纂委員会『度会町史』(1981年度会町役場)
- ・皇學館大学考古学研究会『一之瀬川流域の遺跡』(1981年皇學館大学考古学研究会)



第1図 遺跡位置図 1:100,000 (国土地理院 1:50,000 地形図『伊勢』より抜粋)



第2図 遺跡地形図 1:5,000 (スクリーントーン部分が遺跡)



第3図 調査区位置図 1:2,000 ■:試掘坑

2 層序と遺構

(1) 調査区の設定と基準点の設定

今回の調査に当たっては、東側の調査区をA地区、西側の調査区をB地区とした。両地区を見通しての任意の規準点を設定し、各調査区内に基準点をもとに4m方眼を切り小地区を設定した。各小地区は、北東隅を原点とし、北から南へはアルファベット小文字、東から西へは算用数字で示した。

(2) 基本層序

調査区は背後の丘陵から延びる緩傾斜地に位置する。基本層序は上からⅠ層耕作土、Ⅱ層床土、Ⅲ層暗灰褐色から灰褐色系粘質土の包含層、Ⅳ層にぶい橙色粘質土、Ⅴ層小礫混橙色土であるが、傾斜地をならして水田にしてあるのでⅡ層の下に置き土をした箇所や、Ⅳ層が削られている箇所もある。検出面はⅣ層上面としたが、この層が削られているA地区の東半はⅤ層を検出面として調査を行った。

(3) 遺構

今回の調査では中世末から近世初頭の遺構・遺物および旧石器時代と思われる遺物を検出した。

A 中世末から近世初頭の遺構

掘立柱建物1棟、土坑及び落ち込み13基、井戸1基を確認した。

a 掘立柱建物

SB5(第5図)調査区中央で検出した。桁行3間+南側庇(6.4m)、梁行3間(5.9m)の総柱建物である。方位はN-22.5°・Wの南北棟で、柱掘形は円形である。SK2・3と重複する。平面の検出では前後関係を明らかにすることができなかったが、土層断面観察からSK2・3より新しいと考えられる。遺物は土師器鍋・皿・染付皿などが出土している。

b 土坑

SK3(第6図)SB5・SK2と重複して検出した。SK2との切り合いは検出できなかったが、出土遺物からSK3の方が新しいと考えられる。長辺2.5m、短辺2.2m、深さ50cmの方形土坑で底は平らである。埋土は5層に分けられるが各層の遺物の時期差は認められない。底には直径20

cm程度の石が数点入っていたが、出土状況から投棄されたものと考えられる。遺物は土師器皿・鍋、陶器、石製硯等でコンテナ2箱分ほど出土している。若干古い時期のものも含むが16世紀後半から17世紀初頭を中心とした時期の遺物中心である。SK2(第6図)長辺2.4m、短辺1.4mの方形土坑である。底は東西2つの円形土坑に分かれる。平面・土層断面の観察からは同時存在のものか前後関係があるのか確認できなかった。遺物は土師器鍋・小皿などが少量出土しており15世紀中葉から後葉に位置づけできよう。

c 調査区中央部の土坑群等

検出時に調査区中央に大きな土坑が認められた。いくつかの遺構が重複しているものと考えられたが検出時点では埋土の違いによる区分は出来なかったので、とりあえずSK7としてトレンチを設定し、少しづつ掘削した。ある程度掘削した時点で7つの遺構(SZ11、SK12、SZ13、SZ14、SK15、SK16、SK23、SE24)に分けることができた。

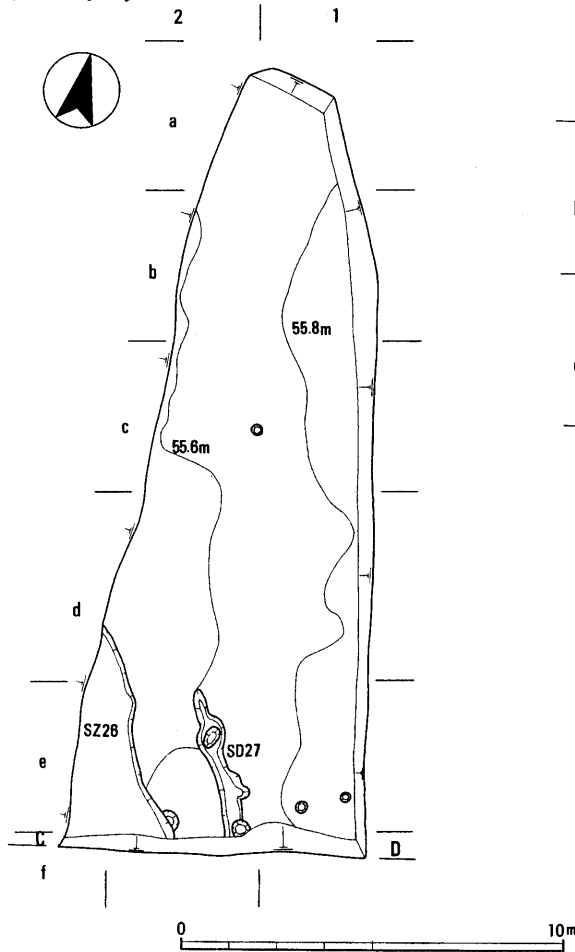
SZ11・SK28 SZ11は不定型で深さ2~3cmの落ち込みである。中央に石列があり、石列の下層でSK28を検出した。石列は途中途切れるが南にも同様のものがあり元々は同一の石列であったと考えられる。遺物はSK28ないしその直上から土師器小皿・鍋、陶器など15世紀後半から16世紀中葉の遺物が出土している。

SK12 SZ11の西で検出した。径1.5mの円形の土坑である。西半分はさらに長径1.4m、短径0.6mの楕円形の形に落ち込んでいる。14世紀後葉の遺物が出土している。

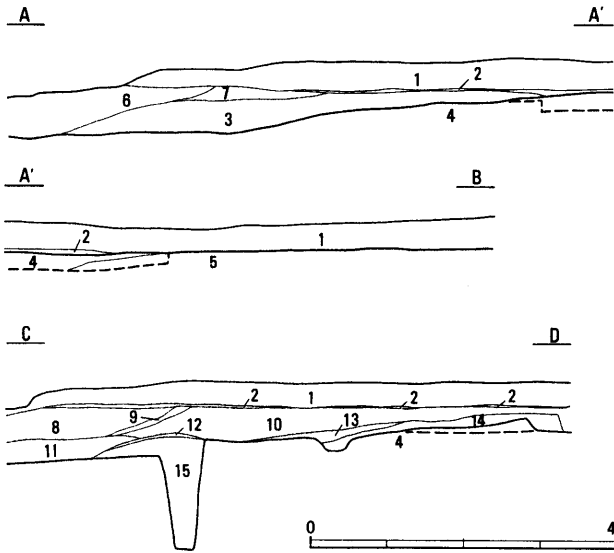
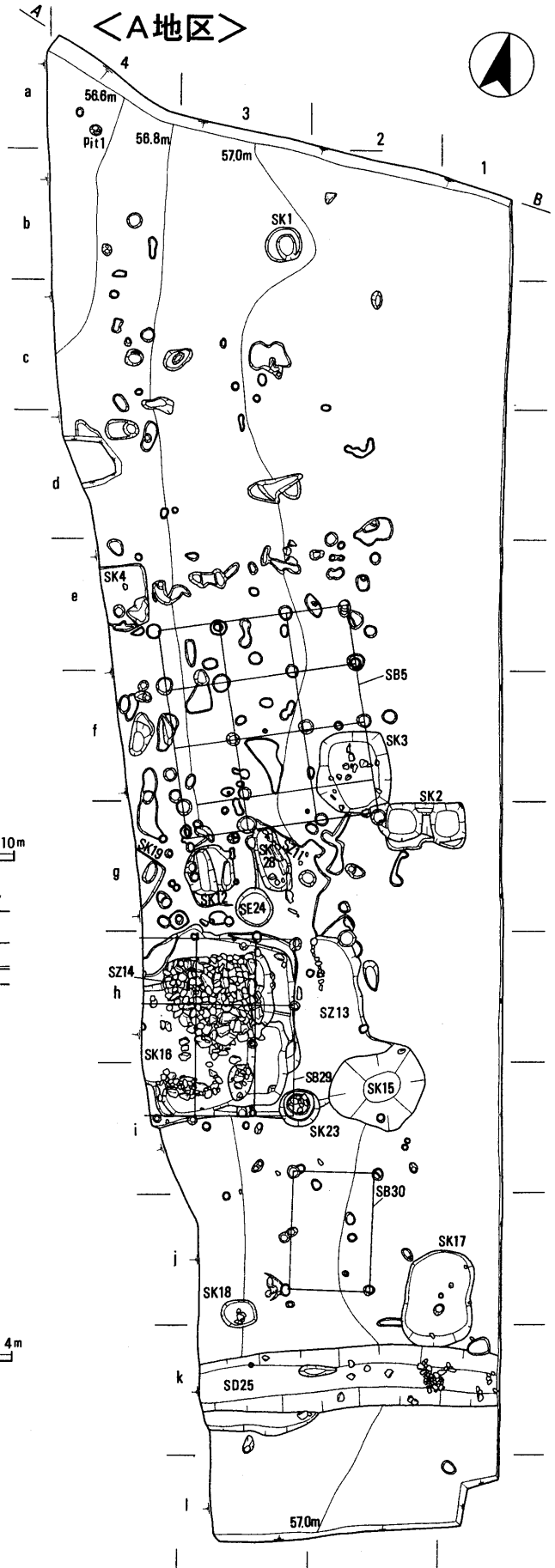
SZ13(第7図)SZ11の南で検出した深さ10cm前後の落ち込みで、埋土はSK14の上ののる。遺物はほとんど出土しなかった。

SK15(第7図)SZ13と一部重複して検出した。SZ13との前後関係は不明である。短径2.2m、長径2.4m、深さ55cmの不整形の土坑で底は楕円状を呈する。遺物は15世紀後葉から16世紀中葉ごろの土師器、陶器が少量出土している。

<B地区>

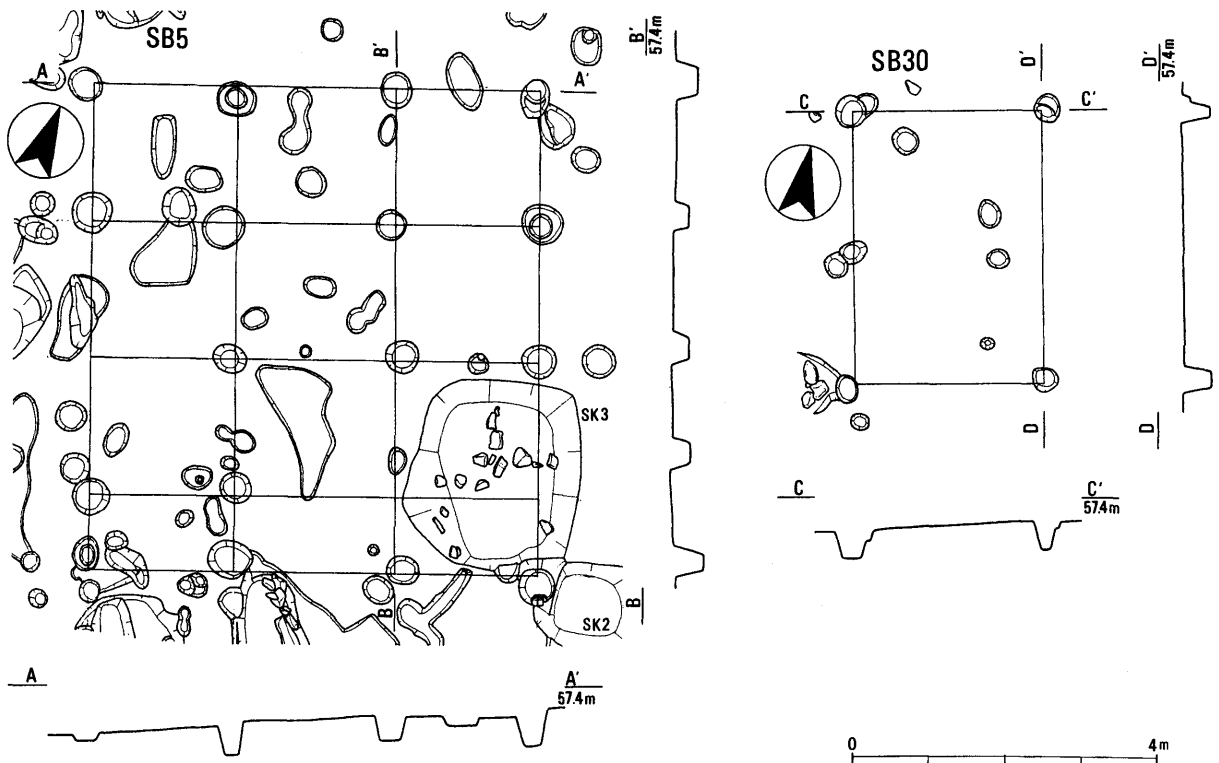


<A地区>



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 耕作土 (灰褐色土) | 9 覆土 (橙色粘質土) |
| 2 床土 (鉄分含暗褐色土) | 10 覆土 (橙色粘質土と暗灰褐色粘質土が混ざる) |
| 3 遺物包含層 (暗灰色粘質土) | 11 覆土 (灰褐色粘質土) |
| 4 遺構検出面 (にぶい橙色の粘質土) | 12 覆土 (にぶい橙色粘質土) |
| 5 遺構検出面 (小礫混橙色土) | 13 遺物包含層 (灰褐色粘質土) |
| 6 覆土 (小礫混橙色土) | 14 遺物包含層 (明灰褐色粘質土) |
| 7 覆土 (小礫混橙色土と暗灰色粘質土が混ざる) | 15 遺構埋土 (灰褐色粘質土) |
| 8 覆土 (橙色粘質土ブロック混暗灰褐色粘質土) | |

第4図 遺構平面図 1 : 200、調査区土層断面図 1 : 100



第5図 SB5、SB30平面図・断面図 1:100

SK16・SB29 (第7図) SZ13の西で一部SZ13の下層から検出した。東西3.6m以上、南北4.4mの方形土坑で、東は一段下の水田造成時に削られている。SB29はSK16の上屋的な役割を果たしていたものと考えられ、方位はN-15°-Eである。南端付近の底部から拳大から人頭大の石がかたまって出土したが、規則性は認められず、遺構廃絶時に投棄されたものと考えられる。検出時は後述のSZ14と区別できずSZ14の南側で集石のない部分をSK16としていたが、整理段階でSZ14の集石の下層から出土した遺物もSK16出土とした。15世紀代の遺物が出土している。

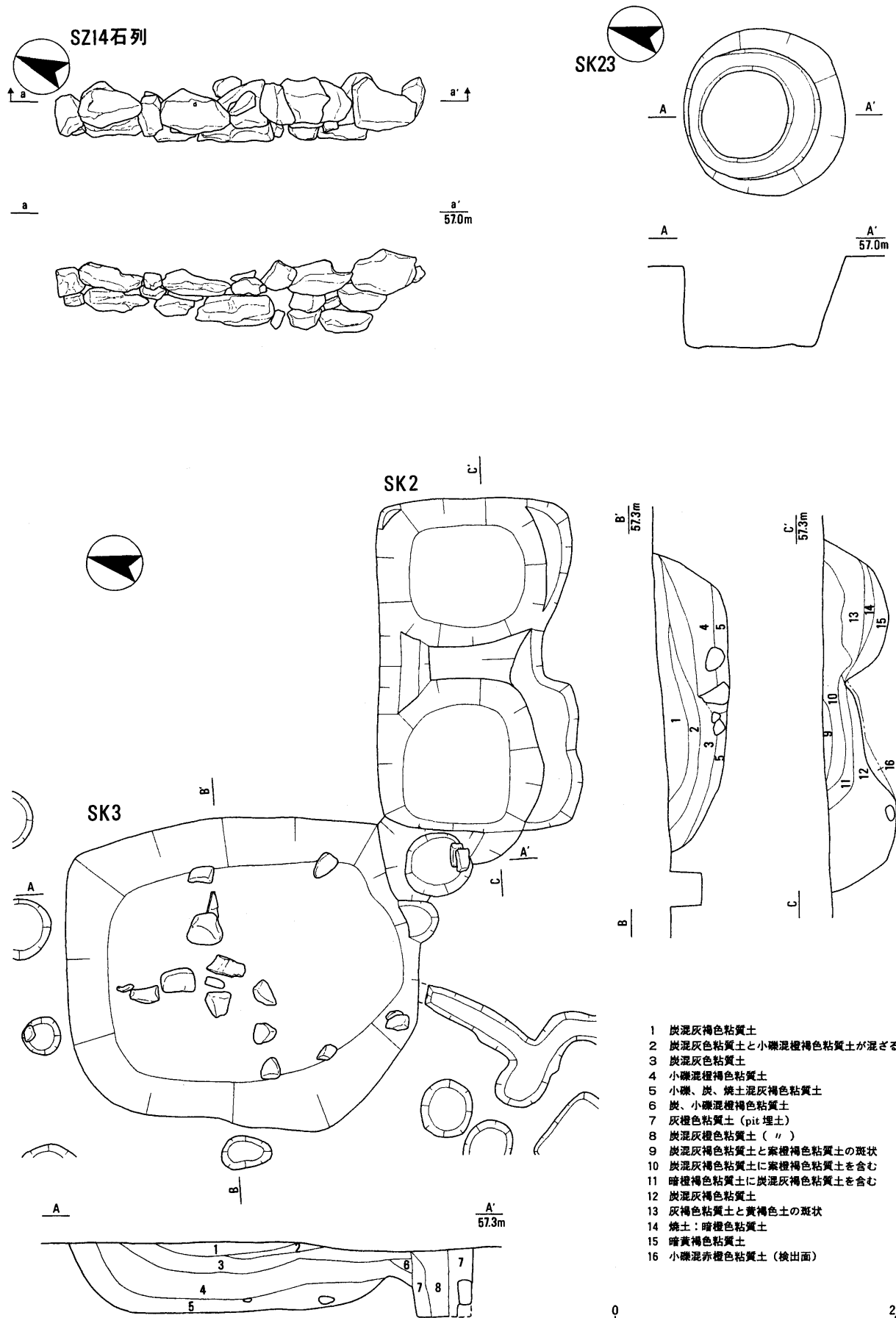
SZ14 (第7図) SK16の北西部で検出した一辺2.8mの方形の集石である。掘形が明確には検出できずにSK16と一緒に掘削してしまったが、断面観察からSK16を切っていることが確認されたため、別遺構とした。北辺、東辺の掘形が確認されている。東側には内側に面をそろえてほぼ2段に組まれた石組が認められたが、他の辺には石組は確認されなかった。また、南東隅は攪乱をうけたためか石が認められなかった。方位はN-22°・

Wである。石は、人頭大のものから大きいものでは50cmを越えるようなものまであり、2・3段に入っていたが規則的には並んでいなかった。石の間からは焼土や炭が多量にが出土した。遺物はSK16との混入が認められるため、集石の間の土器のみを年代決定等に使用した。16世紀の中葉ごろのものと考えられる。

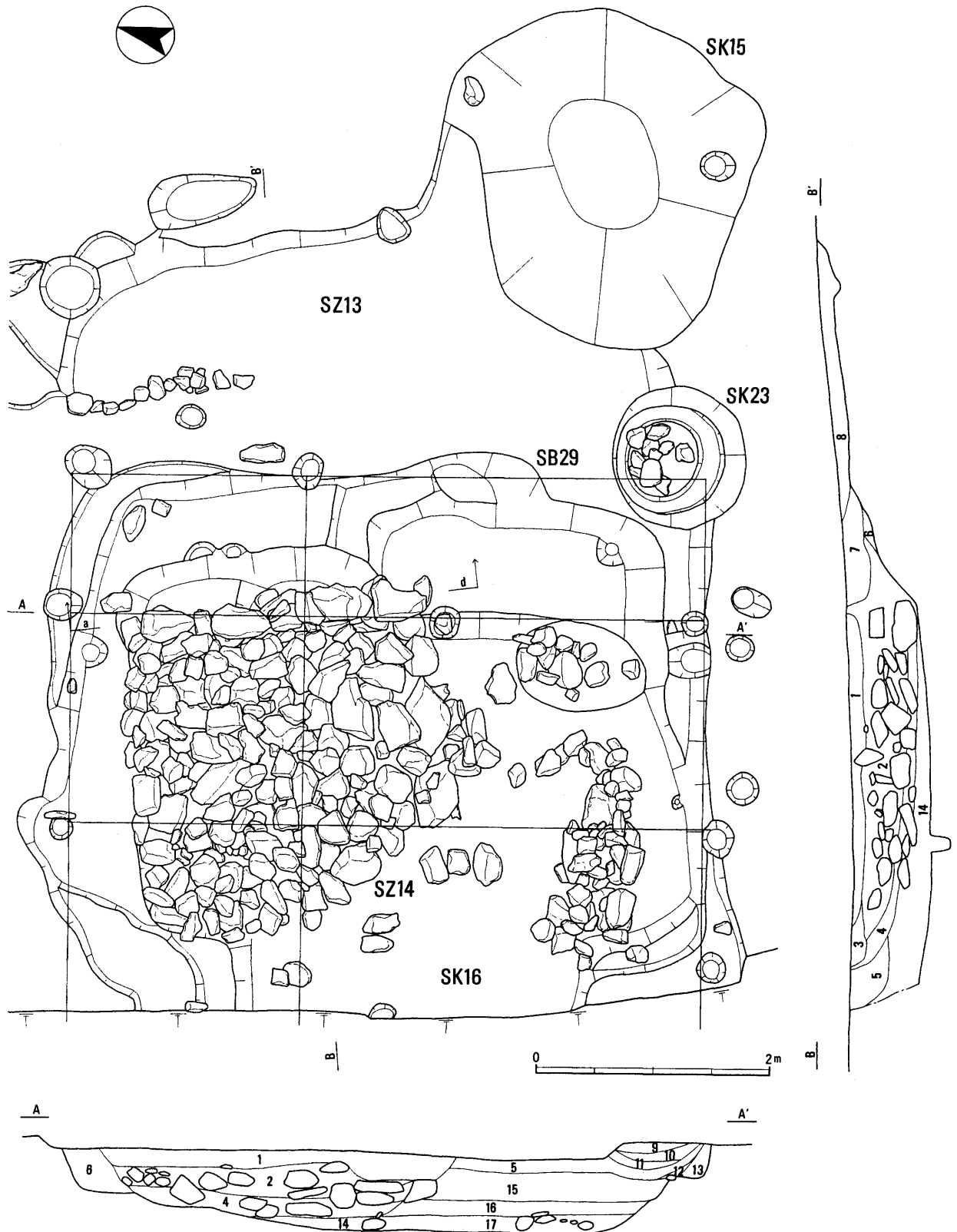
SK23 (第7図) SK15の西で検出した。径1m、深さ60cmの円形の土坑である。底はドーナツ状に周囲が低く、中央部は2cm程度高くなっている。底から浮いた状態形で人頭大の石がかたまって出土した。遺物は土師器皿・鍋、陶器がごく少量出土したのみで時期の特定は困難だが、概ね15~16世紀のものと考えられる。

SK4 調査区中央部西端で検出した。一部は調査区外に延びる。東西1.9m、南北1.4m以上の方形の土坑で深さは10cm弱である。15~16世紀の遺物が少量出土している。

SK17 調査区南部東端で検出した。長径3m、短径2mの不定円形の土坑である。遺物は土師器小皿・鍋、陶器が出土している。小片が多く時期



第6図 SZ14石列、SK23、SK2・3平面図・断面図・側面図 1 : 40



- | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------------------|
| 1 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土の斑状 | 8 炭混灰褐色粘質土 | 15 暗褐色粘質土 |
| 2 焼土混灰褐色粘質土 | 9 灰褐色粘質土に炭と黄褐色粘質土が混ざる | 16 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土の斑状(硬くしまる) |
| 3 灰褐色粘質土 | 10 灰褐色粘質土 | 17 暗褐色粘質土(硬くしまる) |
| 4 灰褐色粘質土と黄褐色粘質土の斑状 | 11 灰褐色粘質土に炭と黄褐色粘質土が混ざる | |
| 5 灰褐色粘質土に炭と黄褐色粘質土が混ざる | 12 灰褐色粘質土に炭と黄褐色粘質土が混ざる | |
| 6 灰褐色粘質土 | 13 灰褐色粘質土 | |
| 7 橙色粘質土と灰褐色粘質土の斑状 | 14 灰褐色粘質土 | |

第7図 SZ13、SZ14、SK15、SK16、SK23、SB29平面図・断面図 1:40

の特定は困難だが概ね 15～16 世紀のものと考えられる。

S Z 26 B 地区南西隅で検出した。現存の規模は南北 3 m、東西 2 m、深さ 5 cm ほどの落ち込みである。15 世紀後葉のものと考えられる土師器鍋、陶器等が出土している。

c 井戸

SE 24 SK 12 の南で検出した、径 1.1 m、深さ 2.5 m の素掘りの井戸である。深さ 0.4 m まで人力で半裁して掘削したが、くずれる危険があったので重機による掘削に切り換えた。底は基盤層である礫の混じる橙色土で止まっており、現状では湧水は認められなかった。あるいは掘削途中でやめてしまった井戸とも考えられる。遺物の出土は非常に少なく、14 世紀後半の土師器鍋・皿が少量出土しているのみである。

d ピット (小穴)

Pit 1 A 地区北西部で検出した。完形の土師器小皿が出土している。

B 時期不明の遺構

a 掘立柱建物

SB 30 (第 5 図) SK 15 の南で検出した。桁行 2 間 (3.6 m)、梁行 1 間 (2.5 m)、方位は N-11.5° E の南北棟の側柱建物である。

b 溝

SD 25 A 地区の南部で検出した。E-15°・N で、幅は 2 m 前後である。底の深さから、東から西の方向に流れていたことがわかる。埋土は上層が耕作土と基盤層の混じったもの、下層は耕作土で他の遺構とは異なり、いかにも新しい感がある。遺物には 15～16 世紀の土師器鍋や陶器が出土しているが、混入と考えられる。底付近で近・現代のものと考えられる丸釘が出土した。現状の水田と方向も同じであり、水田開削時のものか。

3 遺物

(1) 旧石器時代の遺物

旧石器時代については、遺構は確認されず遺物の出土のみであった。出土地点は包含層・土坑への混入で、量は少ない。1 はチャート製の使用痕のある縦長剥片で打瘤を残す。ナイフ形石器のような用途で使用されたのであろうか。このほか、図示しなかったが、赤チャート製の不定形剥片 1 点、チャート製の不定型石核 2 点が出土した。

(2) 中世末から近世初頭の遺物

A SB 5 出土の遺物 (2～6)

土師器小皿 (2) は A 系統¹である。磁器染付碗 (3) は福建・広東省系の碗で 16 世紀後半から 17 世紀初頭のものである。土師器鍋 (4) は伊藤編年²第 3 段階 b 型式のものである。加工円盤 (5・6) はいずれも土師器鍋の体部を利用したもので、5 は周縁を研磨したものである。6 は中央に穴があげられている。

B. SK 3 出土の遺物 (7～33)

土師器小皿 (7～13) は B 系統 (7・8)、C 系統 (9・10)、D 系統 (11～13) がある。磁器染付碗 (14) は福建・広東省系の碗で 16 世紀後

半から 17 世紀初頭のものである。灰釉丸皿 (15) は全面に灰釉が厚くかかり、底には輪トチ跡が残る。大窯編年³の第 2 段階に相当する。灰釉折縁皿 (16) は全面に灰釉のかかり、大窯編年第 4 段階古型式に位置する。志野丸皿 (17～19) は大窯編年第 4 段階新型式に位置する。17、18 の底には円錐ピンの跡が、19 の底には輪トチの跡がみられる。17 の底には炭が付着している。18 は周縁を敲打して加工円盤として再利用している。天目茶碗 (20～22) はそれぞれ大窯編年第 2 段階、第 3 段階新、第 4 段階新に相当する。陶器壺 (23) は常滑産と考えられるが、通常のいわゆる N 字状口縁の退化したものではなく口縁端部にナデを行っている。土師器鍋 (24～29) には小形 (24～27) と中形がある。小形には口縁端部を折り返すものとつまみ上げるものがみられる。28、29 は伊藤編年の第 4 段階 e～f 型式に相当する。30 は小片であるが土師器茶釜の口縁部と考えられる。端部を折り返し、端にはナデが施される。31 は器種不明の土師器である。一見脚付きの皿のように見えるが、脚の端部は現存する破片では生きており、また施

されたハケがここで切れていることからこの部分は窓状に開けられていたと考えられる。玉城町世古遺跡でも窓の付く土器が出土している。世古遺跡例では皿は付かないが、あるいは同様の用途に用いられた土器であろうか。32は土師器羽釜または茶釜と考えられる。石製硯(33)は欠けていて全形は不明だが長方形で、内面には墨が付着している。

C SK 2出土の遺物(34~36)

土師器小皿(34・35)はB系統である。34には口縁部に1か所スズの付着がみられる。灯明皿として利用されていたのであろうか。土師器鍋(36)は半球形体部をもつ。このほか、小片のため図示しなかったが伊藤編年第4段階b・c型式相当の鍋も出土している。

d SZ 11出土の遺物(37~43)

土師器小皿(37)はC系統、同(38)はB系統である。鉄釉稜皿(39)は底が露胎で、大窯編年第3段階に相当する。内面に輪トチ跡が残る。天目茶碗(40)は大窯編年第2段階に相当する。土師器鍋には半球形体部のもの(41)と小形のもの(42)、中形のもの(43)がある。43は伊藤編年第4段階e形式に相当する。

e SK 28出土の遺物(44~52)

土師器小皿はB系統(44~46)、C系統(47)、D系統(48・49)がある。土師器鍋(50~52)は小形で、口縁端部を折り返している。

f SK 12出土の遺物(53~55)

土師器小皿はいずれも白っぽい胎土で、A系統(53)とC系統(54)がある。土師器鍋(55)は伊藤編年第2段階c形式に相当する。

g SK 15出土の遺物(56~60)

土師器皿(56)はC系統である。縁釉陶器はさみ皿(57)は口縁端部に鉄釉を施しており、古瀬戸編年後Ⅳ期から後Ⅳ期新段階に相当する。58は土師器鍋の体部を敲打によって調整した加工円盤である。灰釉端反皿(59)は内底部に印花文を押したもので印花文の位置は若干中央からずれている。大窯編年第1~2段階に相当する。天目茶碗(60)は底部を欠くが鎊釉を施しており大窯編年第2段階に相当する。

h SK 16出土の遺物(61~67)

61~65はSZ 14の集石の下層から、66・67は集石の南側で出土したものである。61・62は白っぽい胎土のB系統の小皿である。61は集石の下で1個体分が上向きに出土した。63は土師器羽釜の蓋と考えられる。64・65は土師器鍋の口縁部で、伊藤編年第3段階a・b型式に相当する。66は陶器の卸皿である。残存部分には釉は認められない。古瀬戸編年後Ⅳ期新段階から大窯編年第1段階に相当する。67は茶釜の口縁部で、端部にナデ、頸部にはハケが施されている。

i SZ 14出土の遺物(68・69)

土師器皿はB系統(68)が出土している。69は大窯編年第2段階の天目茶碗で、敲打により加工円盤に再利用されている。

j SZ 14・SK 16出土の遺物(70~76)

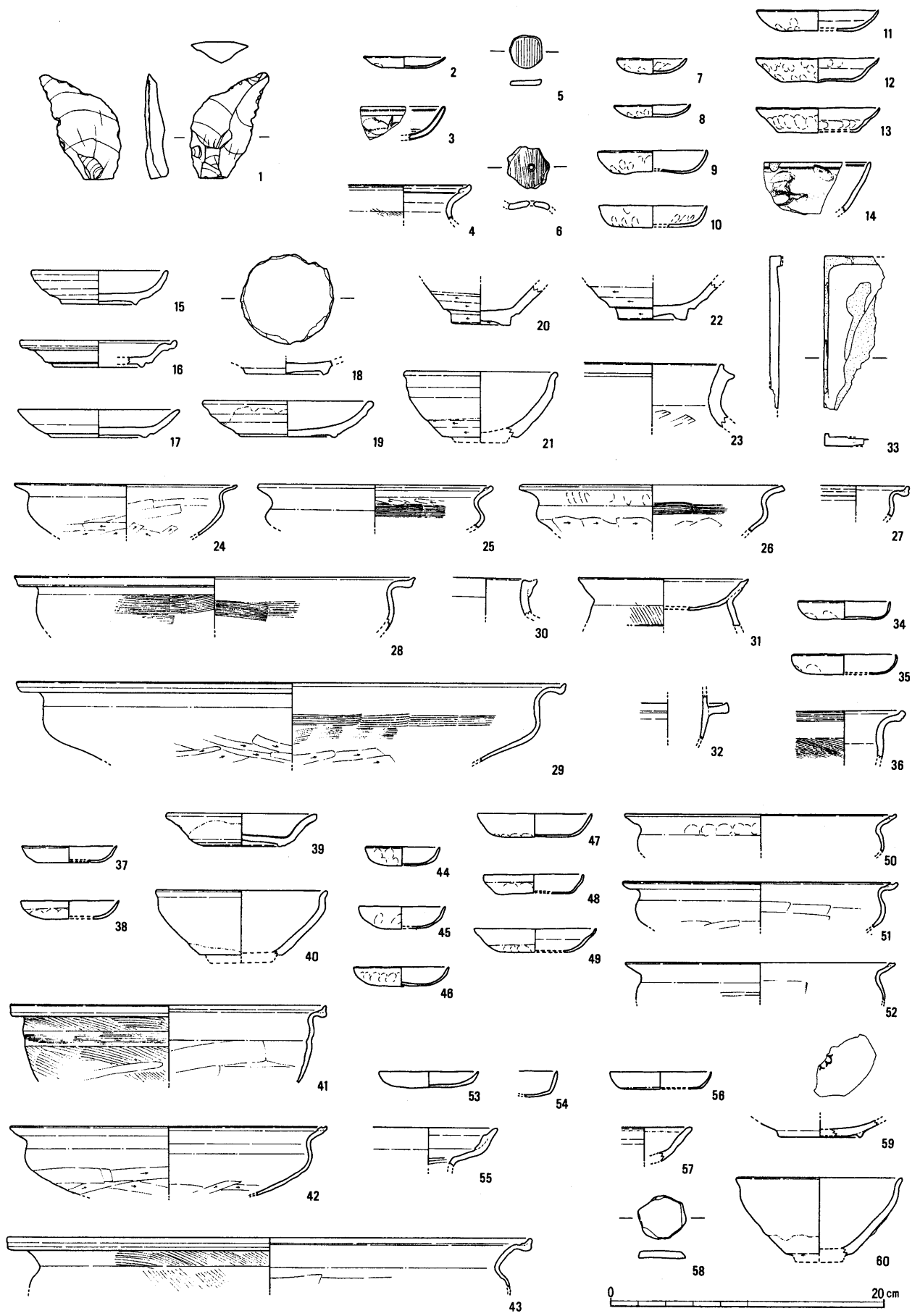
土師器皿はB系統(70)が出土している。縁釉陶器はさみ皿(71)は縁に灰釉がかかっている。焼きが甘く黄白色を呈する。大窯編年第1段階に相当する。天目茶碗(72)は大窯編年第3段階に相当する。73は茶釜の口縁部で、端部を丸くおさめる。土師器鍋は半球形体部をもつもの(74)、中形のもの(75)がある。75は伊藤編年第4段階b形式に相当しよう。76は土師質の土錘で円筒状のものである。

k SK 7出土の遺物(77~82)

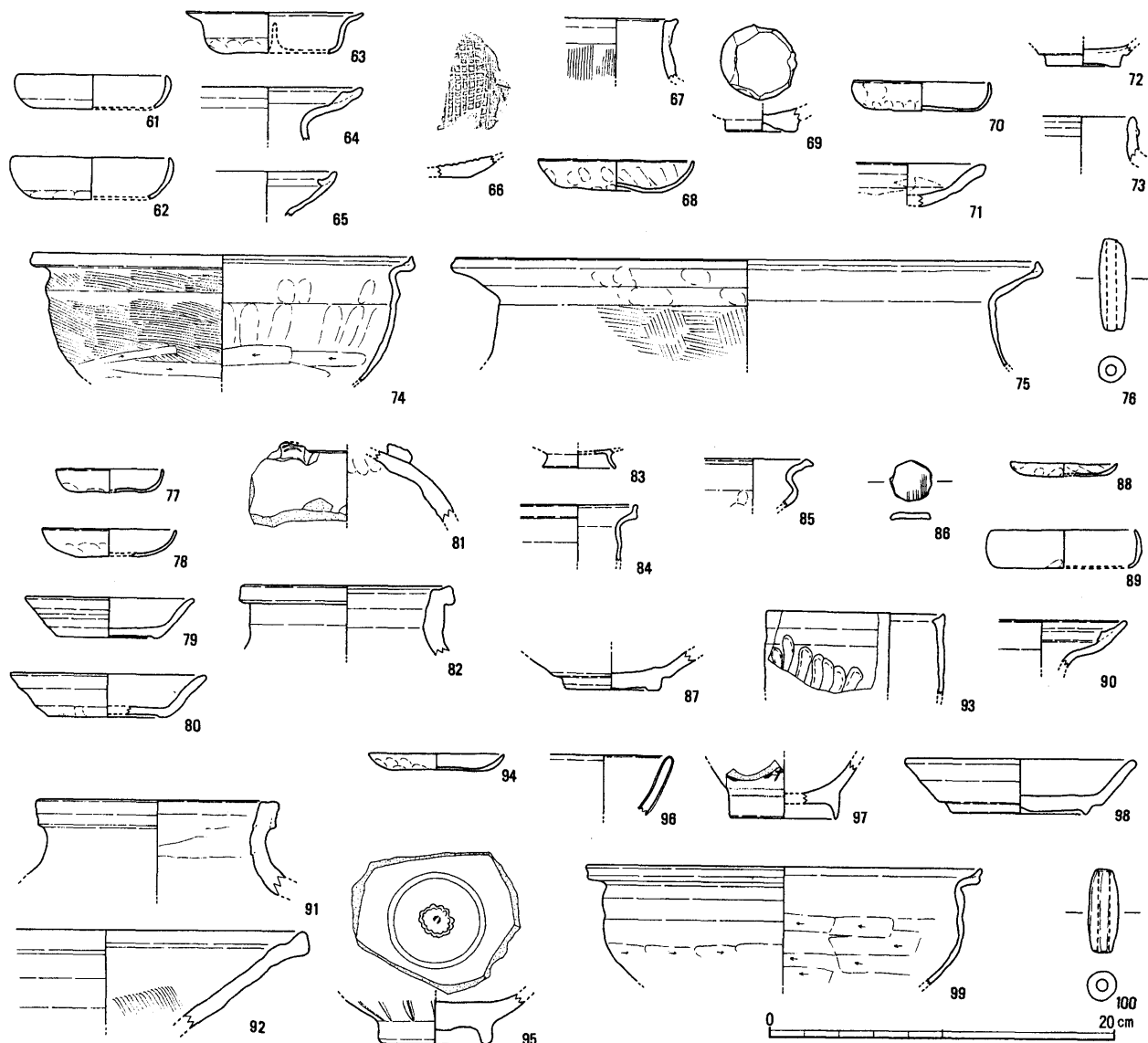
SK 7は前述のとおりSK 11~15・23、SE 24を分離する前の遺構名で、それぞれの遺構の遺物が混入している。土師器小皿(77・78)はいずれもB系統であるが径に違いがみられる。鉄釉稜皿は底まで釉が施されたもの(79)と底が露胎のもの(80)がある。79は内面のトチン跡と外面底部に輪トチ跡、80は内面にトチン跡を残す。それぞれ大窯編年第2段階、第3段階に相当する。81は灰釉の四(三)耳壺で、耳に3条の沈線を持つ。古瀬戸編年中期に相当する。82は常滑産の壺で15世紀後半のものであろう。

l SK 4出土の遺物(83・84)

83は土師器小碗である。土師器鍋(84)は口縁部のみ出土であるが半球形体部をもつものと考えられる。



第8图 出土遗物实测图1 1:4



第9図 出土遺物実測図2 1:4

m SK17出土の遺物(85・86)

85は小形の土師器鍋である。口縁端部が折り返されている。86は土師器鍋の体部を敲打によって加工した加工円盤である。

n SK26出土の遺物(87)

87は平碗の底部で古瀬戸編年後Ⅳ期から後Ⅳ期新段階に相当する。

o SE24出土の遺物(88～90)

88・89は土師器皿で88がA系統、89がB系統である。90は土師器鍋の口縁部で、伊藤編年3段階a形式に相当する。

p SD25出土の遺物(91・92)

91は陶器鍋で常滑産の15世紀後半のものか。92は播鉢で登り窯編年第3小期に位置づけられる。

q pit1出土の遺物(93)

93は美濃産陶器の香炉で登り窯編年第7小期に位置づけられる。

r 包含層出土の遺物(94～100)

94はA系統の小皿で、ピット底近くから完形で出土した。磁器椀(95)はA地区の工事中に出土した。龍泉窯産のもので、14世紀後半から15世紀前半のものである。96も龍泉窯系の磁器椀で、14世紀後半から15世紀前半のものである。97は美濃産の磁器広東碗で登り窯編年の第10小期に相当する。98は灰釉の反皿で登り窯編年の第3・4小期に相当する。99は土師器鍋で半球形体部をもつものである。100は土師質の土錘で中央がやや膨れた円筒状のものである。

[註]

- 1 南伊勢系土師器皿の分類は次の分類に従った。
(伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』1993年、三重県埋蔵文化財センター)
- 2 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『研究紀要第1号』1992年、三重県埋蔵文化財センター)
- 3 藤澤良祐『瀬戸市陶磁史編四』(1993年、愛知県瀬戸市)
- 4 藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991年瀬戸市歴史民俗資料館)
- 5 藤澤良祐「本業焼の研究(3)ー下品野村・下半田川村を中心にー」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』19889年、瀬戸市歴史民俗資料館)

3 調査のまとめ

(1) SZ14・SK16について

SZ14・SK16は方形のプラン、平らな底をもちSK16は周囲に上屋としてのSB29を伴う。いずれも単なるごみ穴とは考えられない。SZ14の東側には2・3段の石組みがみられるが、周囲に石組みのみられる遺構は中世にはよくみられるもので、度会町内でも野田・研山遺跡で基の石組み土坑が確認されている。登り遺跡のSZ14は内部にも石が多量に入っていることが野田・研山遺跡との相違点であるが、もともと四辺に石組みがあったものが廃絶時に崩れたりあるいは人為的に崩されたと考えられることもできよう。これらの石組土坑の性質については現在のところ不明だが、SZ14では石の間に焼土・炭がみられ、なんらかの火を用いる作業に関連したものと考えられる。

(2) 出土遺物と遺構の時期について

登り遺跡では14世紀中葉から17世紀前葉の遺構が確認された。遺構の時期は大きく3期に分けることができる。

第Ⅰ期は15世紀前葉までの時期で伊藤編年3段階相当の土師器及び古瀬戸から大窯第1段階の陶器が出土する。SK12・SE24・SK16があてはめられる。

第Ⅱ期は15世紀中葉から16世紀後半までの時期で、伊藤編年第4段階の土師器及び大窯第2・3段階のものが出土する。SK2・4・15・17・23・28、SZ11・14・26があてはめられ、当遺跡の主要時期を占める。

第Ⅲ期は16世紀末から17世紀初等の時期で、伊藤編年第4段階e～f型式の土師器及び大窯第4期のものが出土するSK3とSB5がある。

登り遺跡は、「1位置と環境」で述べたとおり、一之瀬川の段丘上で、丘陵南西部の日当りの良い緩斜面に位置している。同川の流域には段丘上に集落が点在し、中世から近世の遺物の散布が確認されている。本調査によって、これらの集落の一端を垣間見ることができた。

(西村)



A地区主要遺構 北から



B地区全体 南西から

図版2



S Z14・S K16 (集石除去前) 西から



S Z14・S K16 (集石除去後) 東から



SK2・SK3 西から

Ⅲ 度会郡度会町 野田遺跡・研山遺跡

1 位置と環境

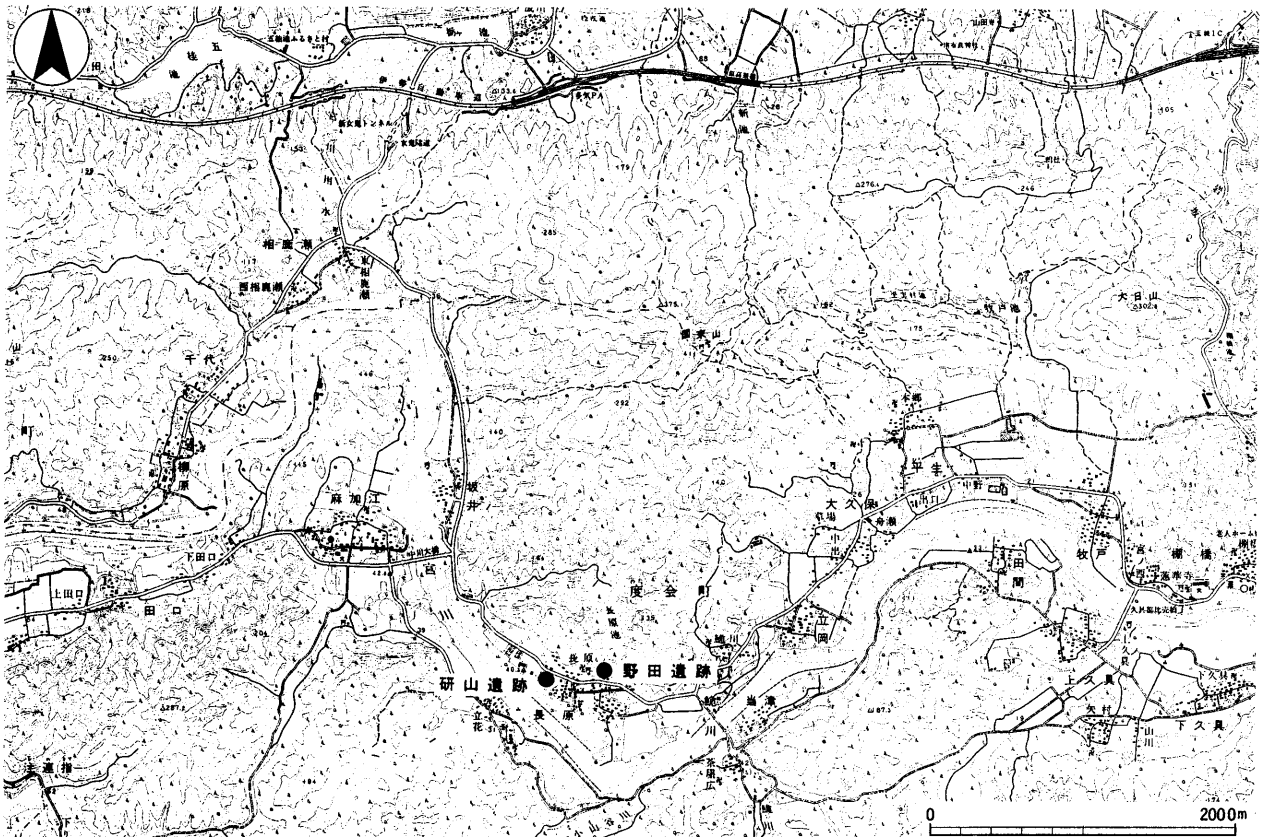
三重・奈良県境を画する大台ヶ原山系に源を発し、大きく蛇行を繰り返しながら東流する宮川は、上流域では大杉谷に代表されるV字渓谷、中流域では河岸段丘、そして下流では肥沃な平野を形成する南伊勢地方最大の河川である。

野田遺跡・研山遺跡は、度会郡度会町長原に所在する。度会町は宮川中流域に位置し、町域の大半を山地が占める。そのため、集落及び耕作地は宮川とその支流によって形成された河岸段丘の段丘面に集中する。この段丘面は水利に乏しいことから畑地が多く、度会町から上流の大台町一帯は茶畑が広がる県内でも有数の緑茶生産地である。

度会町内には多くの遺跡の存在が知られている。その大半を縄文時代及び中世のものが占めるが、旧石器時代の遺物も確認されており、相当古くから人々の生活が営まれていた場所であることがわかる。その反面、弥生時代から古代にかけての遺跡の確認例は少ない。

古代には度会郡は多気郡・飯野郡とともに伊勢神宮の所領となり「神三郡」と呼称されていたが、当該時期の実態は不明な点が多い。

中世前期には神宮祭主大中臣氏によってこの一帯の開発が進み、文献には葛原・大橋・久具・麻加江・岩坂・立花などに御園・御厨が存在したことが記録される。大中臣氏の氏寺として建立された棚橋の蓮華寺(後に法楽寺と改称)は、鎌倉時代には公家・武家の祈禱所として繁栄した。大中臣氏による開発にリンクするかのごとく、鎌倉時代以降の宮川沿いに集落を中心とする遺跡が展開する。南北朝期には南朝方の北畠氏がこの地域に進出、その拠点として一之瀬城が成立。それに対し蓮花寺は醍醐寺三宝院との関係から北朝方の拠点となり、この一帯は両者がせめぎあう場となった。その影響から宮川流域の軍事上の要衝に中世城館が分布する状況となり、野田遺跡の背後の丘陵頂部には長原城が所在する。



第1図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院1:25,000地形図『国東山』より抜粋)

2 野田遺跡

(1) 遺構

調査の結果、中世末から近世にかけての土坑・井戸・溝・柱穴等の遺構を確認した。柱穴の大半は掘立柱建物を構成するものである。

掘立柱建物 報告書作成段階で、都合6棟を確認している。以下に主な遺構の概略について述べる。

SB34 桁行2間×梁行2間の規模を有する建物。柱間は、桁方向が約2m、梁方向が約1.5mと不規則である。

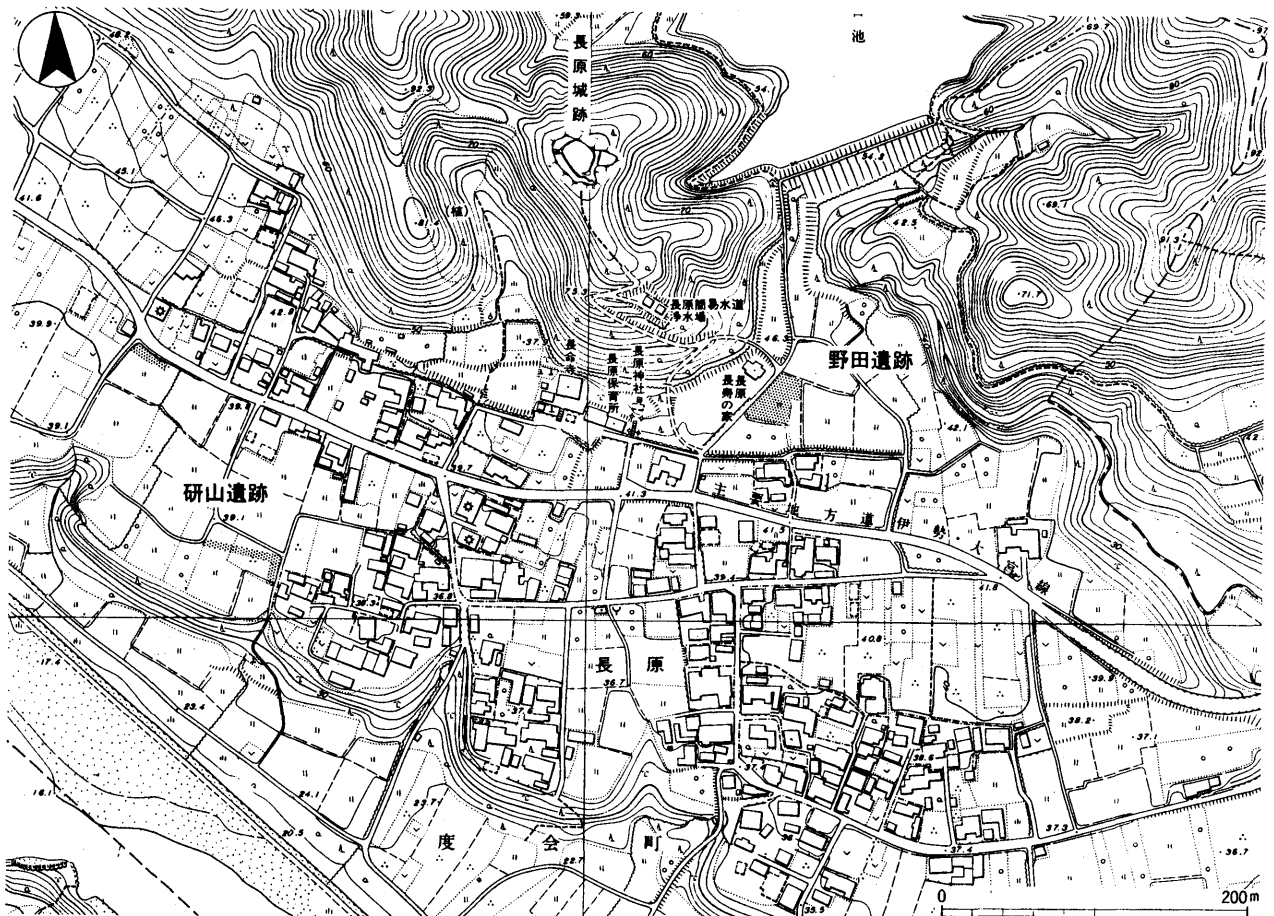
SB35 SB34の西側に位置する。部分的にSK27掘削により柱穴が消滅しているが、桁行2間×梁行2間の規模を有する建物になるものと思われる。柱間は、桁・梁方向ともに約1.8m。

SB36 SB34の南側に位置する。桁行3間×

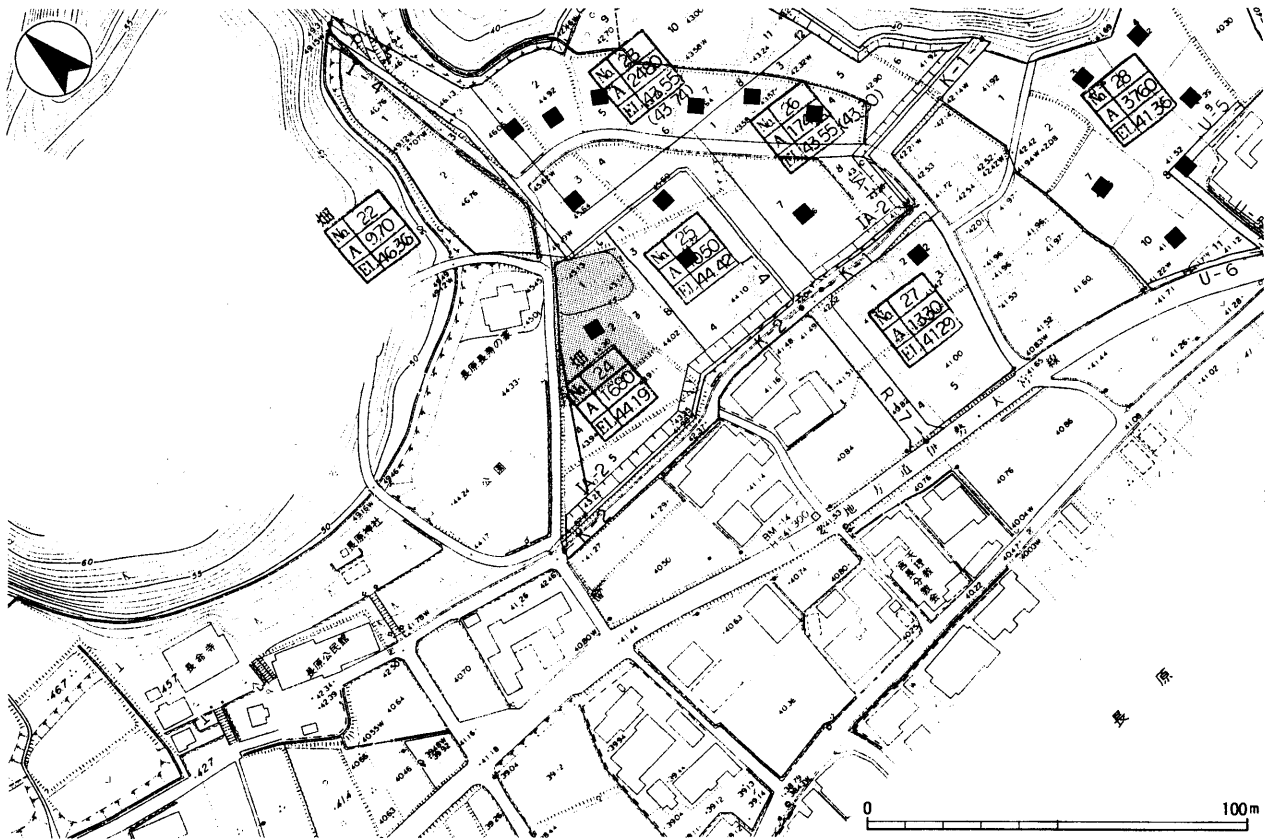
梁行2間の規模を有する建物。柱間は、桁方向が1.5～2.0mと不等間、梁方向が約1.7mの等間となる。建物南東隅部分には、1.3×1.1m・深さ0.13mの方形土坑が重なる。

SB37 SB36の南側で一部重複する形で確認した。桁行4間×梁行3間の規模を有する建物。柱間は、桁方向・梁方向共に1.8～3.0mと不等間となる。南東隅部分には後述するSK10が、この建物と重なる位置で確認されている。

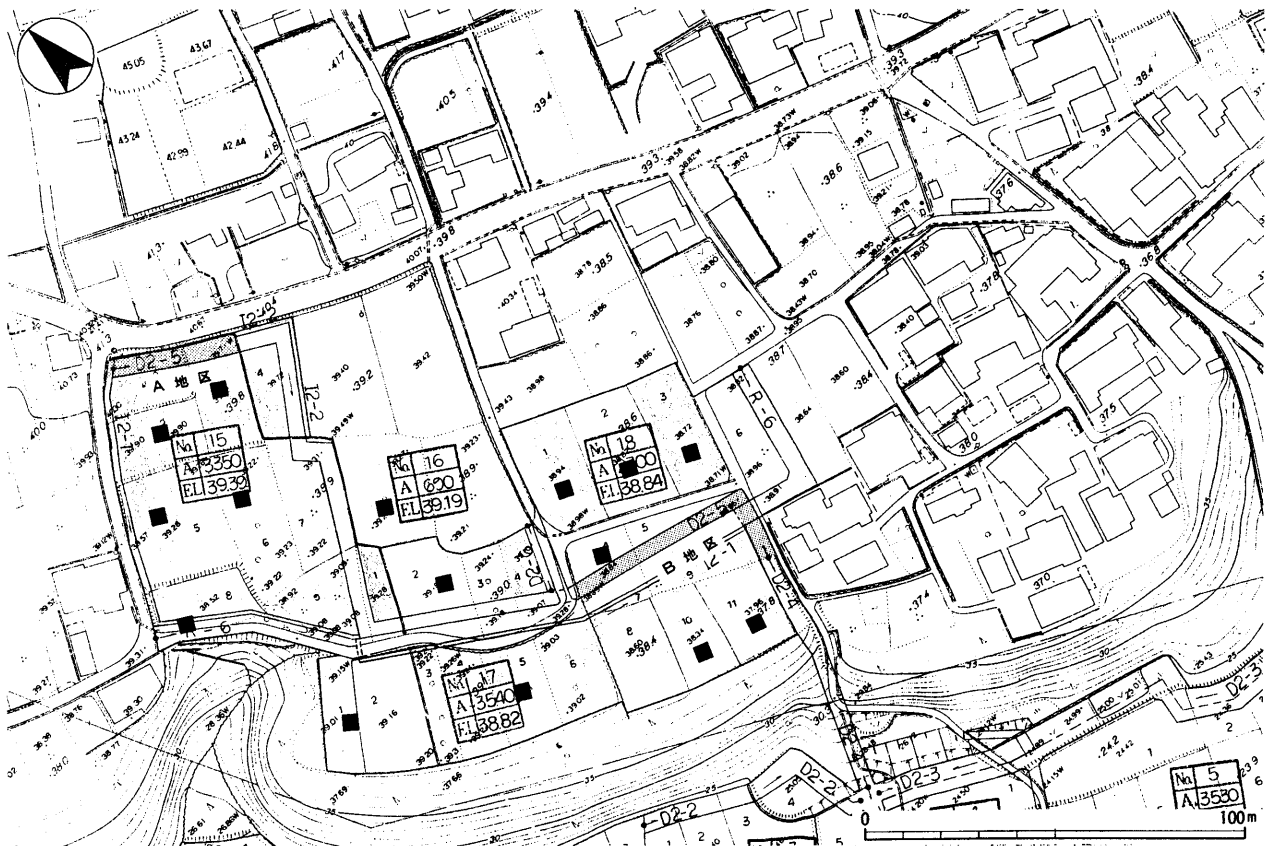
SB38 SB37と重複する位置で確認した。桁行4間×梁行2間（東側3間）の規模を有する建物。柱間は、桁方向が2.3～2.5m、梁方向が2.3m（東側1.5m）と不等間となる。南東隅部分には後述するSK11が、この建物と重なる位置で確認されている。



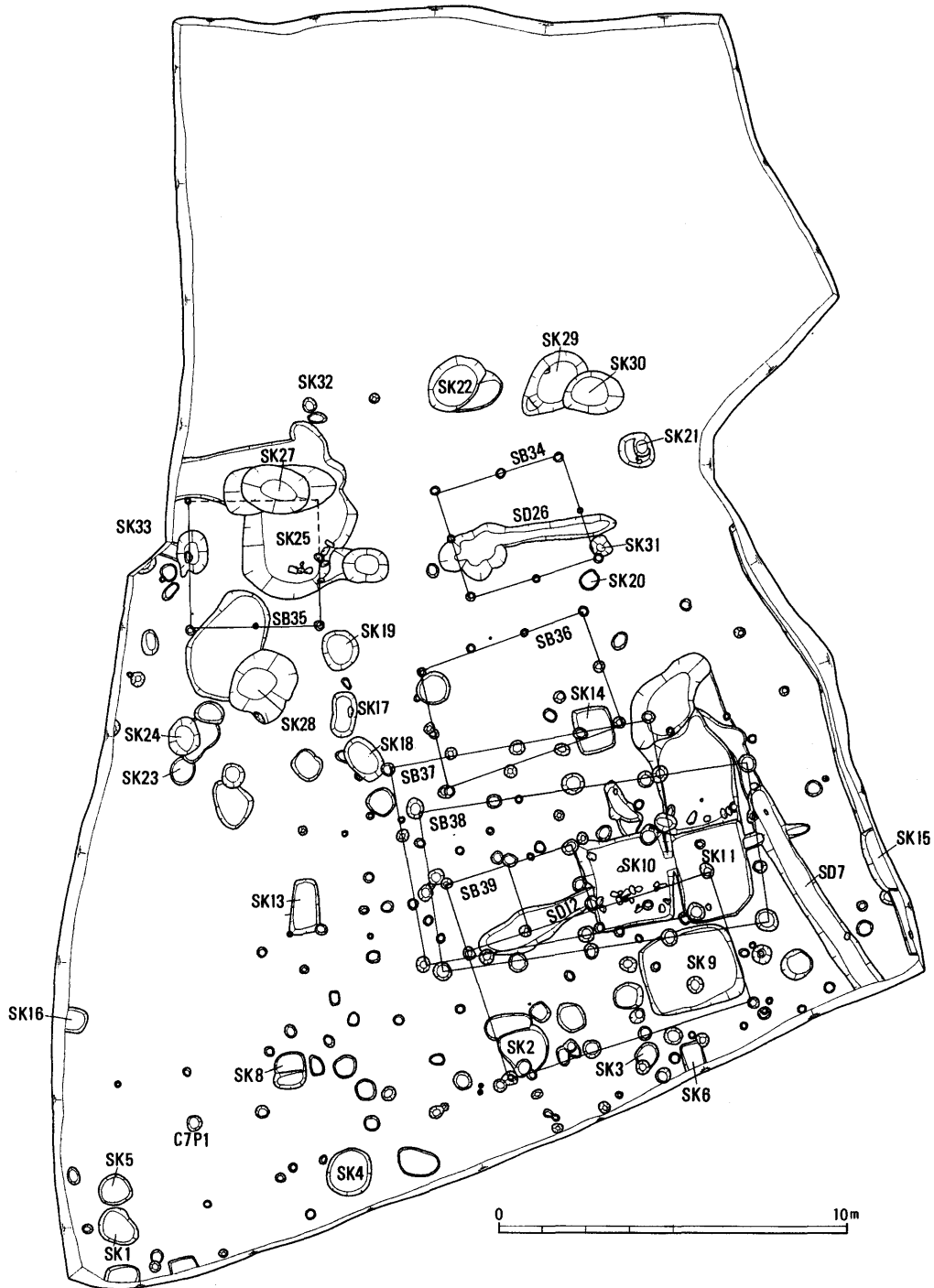
第2図 遺跡地形図 1:5,000 (『度会町森林基本図』1:2,500より抜粋)



第3図 野田遺跡調査区位置図 1:2,000 ■=試掘坑



第4図 研山遺跡調査区位置図 1:2,000 ■=試掘坑



第5図 野田遺跡遺構平面図 1 : 200

SB39 梁方向の柱穴で確認できなかったものがあるが、桁行4間×梁行2間の建物になると考えられる。北側には桁行2間×梁行1間の張り出し部分に取り付け形状か。南東隅部分には後述するSK9が、こ

の建物と重なる位置で確認されている。

土坑 多数確認した。その内、掘立柱建物に伴うと思われる方形土坑が3~4基ある。

SK9 調査区南東で確認された、2.3×2.8m・深

さ約0.25mの隅丸方形の土坑。埋土は黒褐～灰褐系の粘質土で、部分的に炭化物・黄褐色系土がブロック状に混入する。土坑内部のトーンで示した範囲では、火を受けた粘土塊が確認された。この土坑は、SB39の南東隅にぴったり重なる形で掘削されており、この建物に伴う施設であると思われる。

SK10 前述SK9の北に隣接する場所に位置する、1辺約2.5m・深さ0.2mの方形土坑。埋土は黒褐色系の粘質土で、底部に炭化物・黄褐色土が混入する灰褐色粘質土が貼られたような状況で確認された。SK9同様に土坑内部のトーンで示した範囲で火を受けた粘土塊が、それ以外には焼けて変色した複数の礫を確認した。この土坑は、SB37の南東隅にぴったり重なる形で掘削されており、この建物に伴う施設であると思われる。埋土中からは土師器鍋口縁部小片・小皿が出土している。

SK11 SK10の東に隣接する場所に位置する。2.1×2.7m・深さ約0.25mの方形土坑。埋土は黒褐～淡灰褐系の粘質土に黄褐色系土が粒状あるいはブロックで混入する。この土坑も、SB38の南東隅に重なる形で掘削されており、この建物に伴う施設であると思われる。埋土中からはほぼ完形の土師器小皿が出土している。

SK25 後述するSK27に先行する。長径約3.0m・深さ約0.2mのややいびつな円形土坑。北側約1/3をSK27に破壊されている。南壁寄りの部分で石臼の破片及び礫がかたまて確認された。

SK27 調査区中央西端に位置する。長径2.0m、短径1.4m・深さ約2.2mの規模をもつ土坑。素掘りで崩落の危険があったため、調査最終段階で重機による断ち割りを実施した。埋土は、上層の検出面レベルでは炭化物・焼土・黄褐色系土が混入する黒褐色粘質土、その下層は褐色系粘質土が2層、さらにその下層は黄褐色系土がブロック状に混入する黒褐色粘質土となり、一気に埋められた状況を呈する。ここでは土坑としたが、井戸である可能性が高い遺構である。

SK28 SK27の南側に位置する。径1.8m前後・深さ約0.35mのいびつな円形土坑。内部には拳大以上の礫が多く投棄されていた。また、埋土からは鍋・茶釜等の南伊勢系土師器が出土している。

溝

SD7 調査区南半部東で確認した南北方向の溝。確認できた規模は、幅0.8m・深さ0.25～0.3m・延長6.5m。南端部は調査区外に伸びる。埋土は褐色系の粘質土で、部分的に黄褐色土・焼土が混入する。

SD12 SK10・11、SD7に先行して東西方向に掘削された遺構で、中央部はSK10・11によって破壊されていた。確認できた規模は、最大幅1.1m・深さ約0.3m・延長約10m。暗褐色系粘質土で、黄褐色土が混入する埋土から、土師器茶釜の蓋・小皿等の遺物が出土している。

SD26 調査区中央で確認された東西方向の遺構で、SD12と並行する位置にある。確認できた規模は、幅約0.6m・深さ約0.15m・延長約5.0m。西端部が土坑状となるのは、他の遺構との重複の可能性があるが、検出段階では明確にできていない。埋土からは、鉄釉を施した陶器皿等の遺物が出土している。

その他の遺構

ピット群 調査区南側で集中して確認され、北側では全く確認されていない。調査区は丘横行が陵裾の傾斜地で、現状では北側ほど標高が高い。恐らくこの部分にもかつてはピット等の遺構が存在したが耕作地の造成により削平されたのであろう。

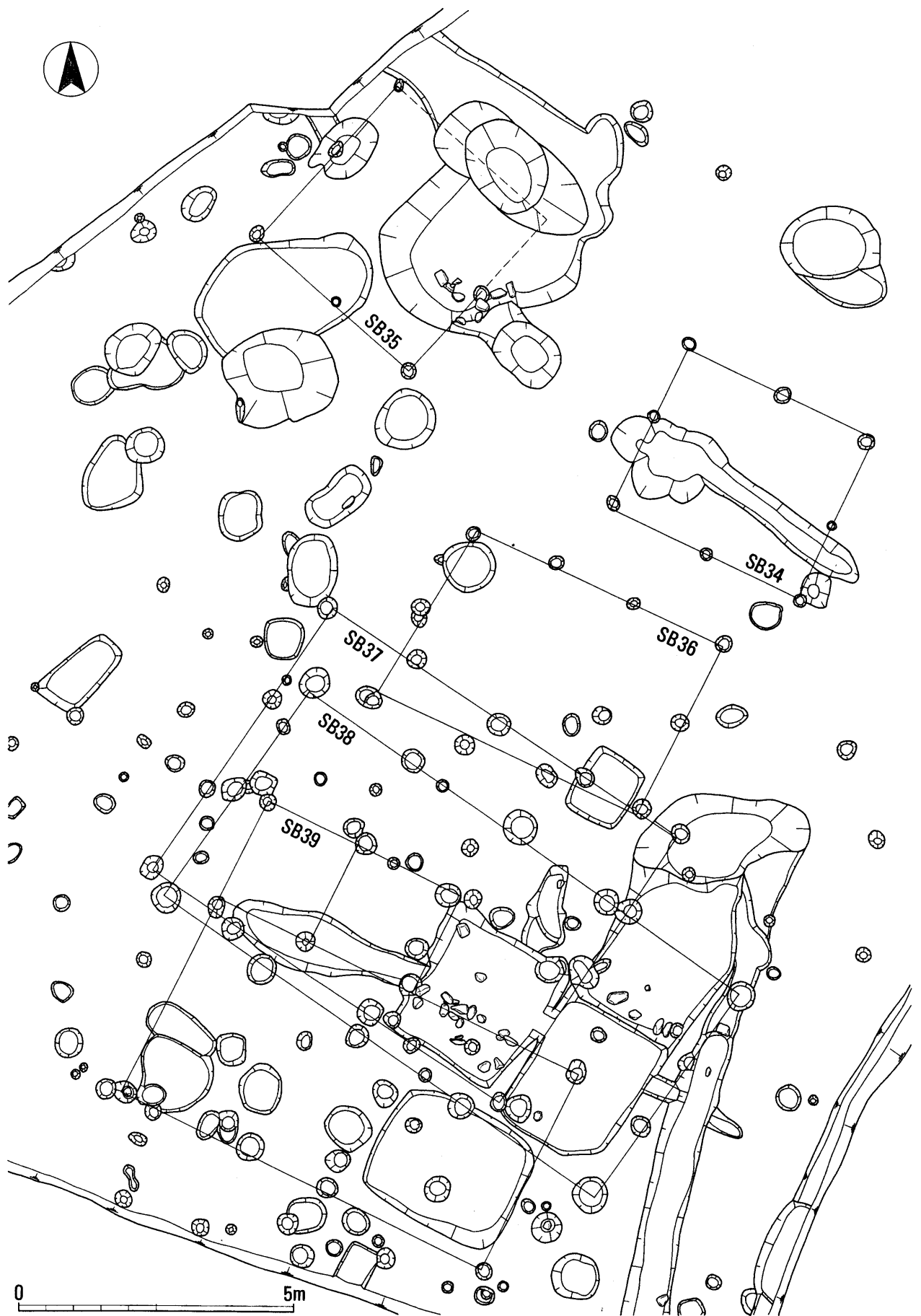
今回、掘立柱建物として認定した以外のピットも、同様に掘立柱建物或いは柵列等の構造物を構成する遺構である可能性が高いが、ここでは特徴的なものに限定して報告する。

ピット1 C-7グリッドで確認された。長径約0.5m・深さ約0.2mと、小土坑程度の規模をもつ。直近の周囲にはピットが存在せず、単独で存在する。埋土中からはほぼ完形の土師器小皿3枚が出土していることから、地鎮等の祭祀のため埋納された可能性が高い。

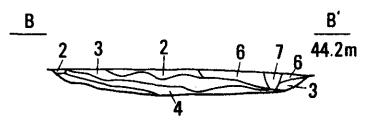
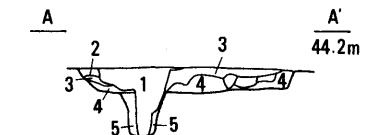
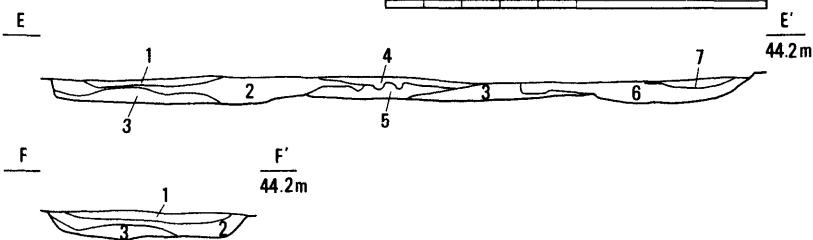
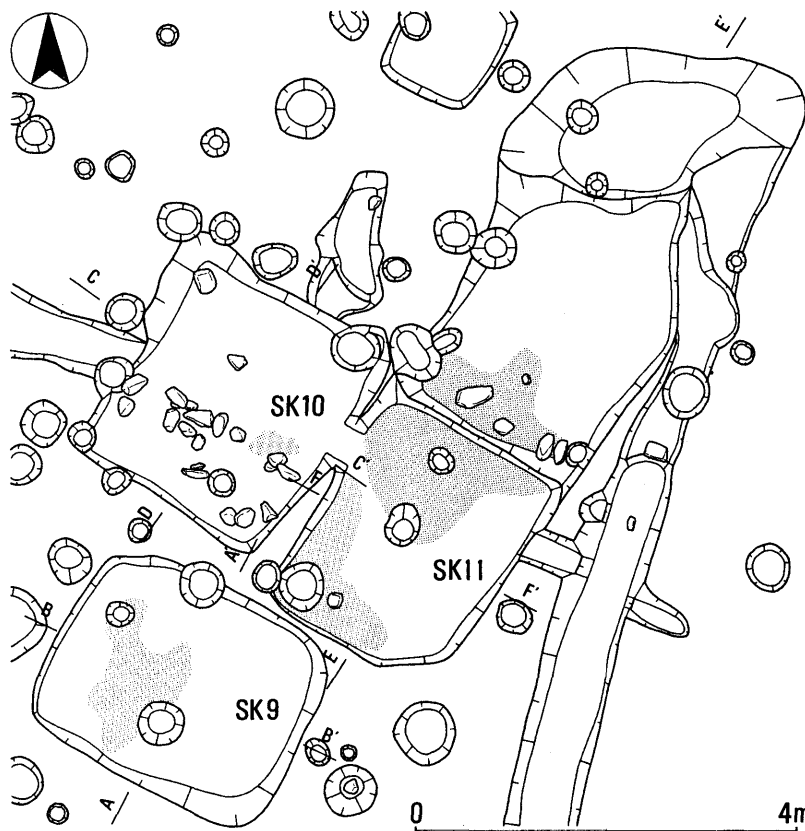
(2) 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、遺物整理箱に換算して1箱と少ない。ここでは主な出土遺物の概略を述べる。

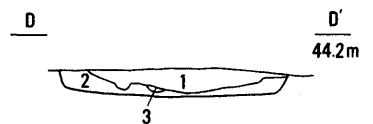
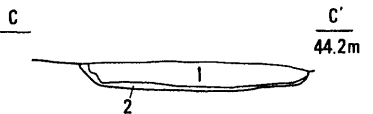
1はSD12出土の土師器製の蓋。底部内面中央には扁平な蒲鉾形の摘みが張付けられる。内外面はナデで調整し、口縁端部に沈線1条を巡らせる。2はSK28出土の土師器茶釜。口縁部上面にはナデによる面をもち、体部はハケで調整する。3は同じくSK28



第6図 野田遺跡掘立柱建物群平面図 1 : 100

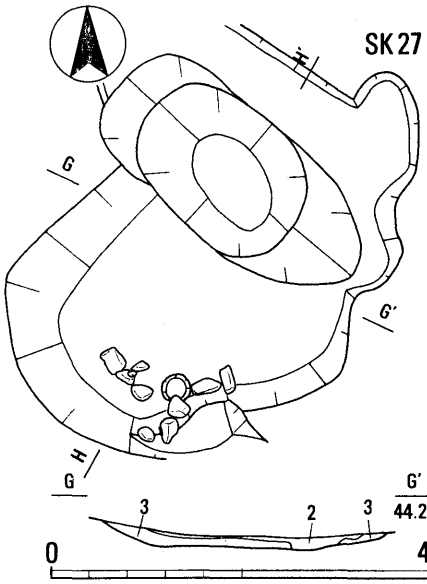


- SK9
- 1 暗褐色粘質土
 - 2 黒褐色粘質土
 - 3 黒褐色粘質土に黄褐色粘土ブロック混入
 - 4 淡灰褐色粘質土に黄褐色土・炭等混入
 - 5 灰黄褐色砂礫(粘質)
 - 6 灰褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 7 暗褐色土

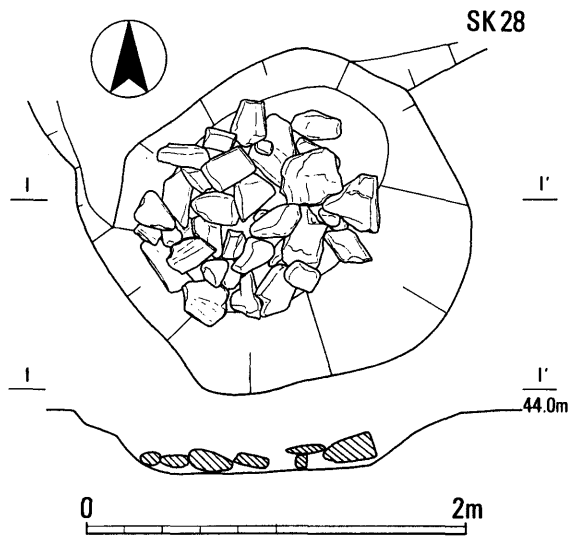
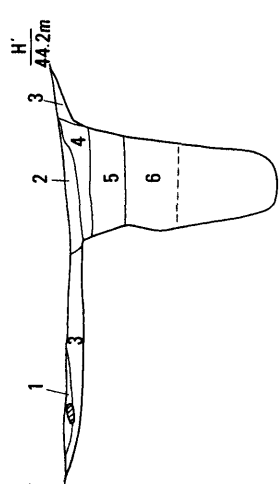


- SK10
- 1 黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 2 灰褐色粘質土に焼土・炭・黄褐色土ブロック混入
 - 3 黄褐色粘土ブロック

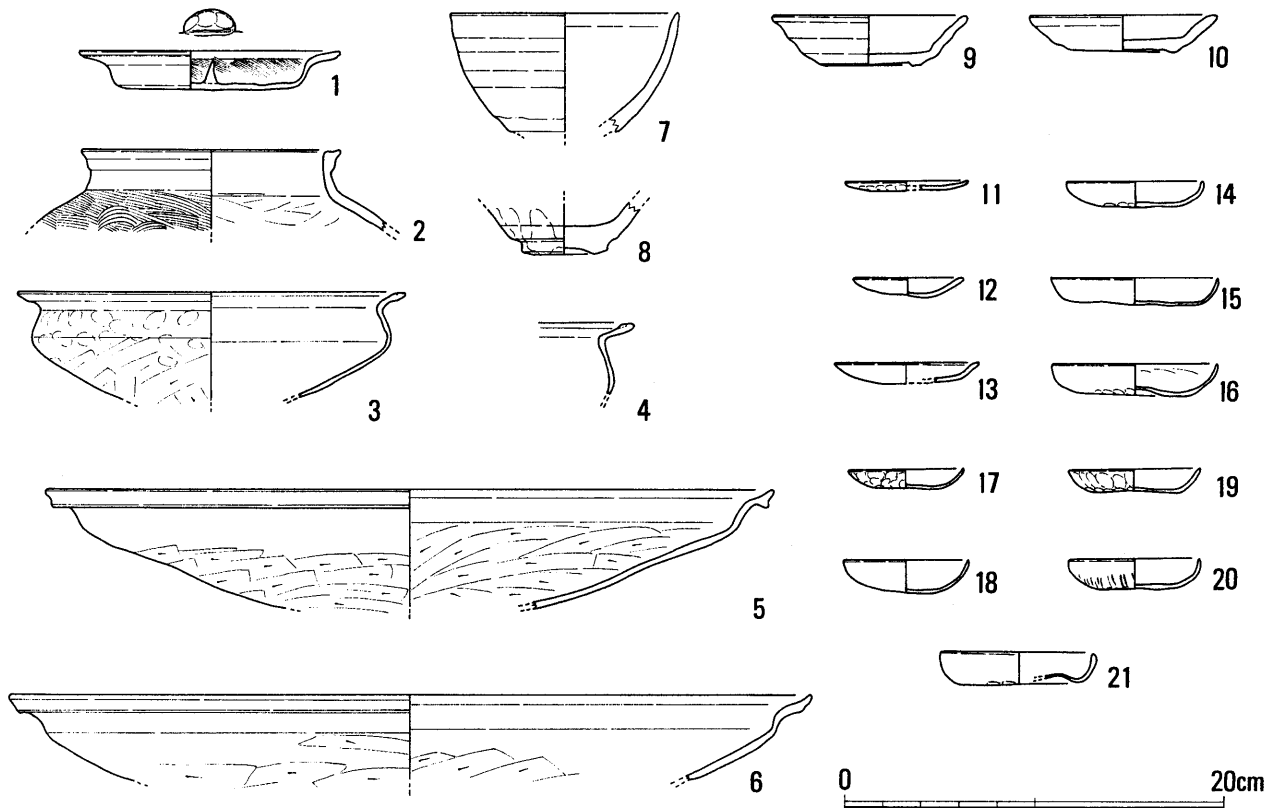
- SK11
- 1 黒褐色粘質土に炭・焼土・黄褐色土ブロック混入
 - 2 淡灰褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 3 黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 4 黒色粘質土
 - 5 黒褐色粘質土



- SK27
- 1 暗褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 2 黒褐色粘質土に炭・焼土・黄褐色土ブロック混入
 - 3 暗褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入
 - 4 暗褐色粘質土
 - 5 明褐色粘質土
 - 6 黒褐色粘質土に黄褐色土ブロック混入



第7図 野田遺跡SK9~11・SK27平面図・土層断面図 1:40/SK28礫出土状況図 1:20



第8図 野田遺跡出土遺物 1 : 4

出土の土師器鍋。く字状に強く屈曲する口縁端部を折り返し、横位のナデで調整する。体部上半をオサエ・ナデ、下半をケズリで調整する。4はSK10出土の土師器鍋。細片のため断面のみ提示した。口縁部は3と同様に折り返しの後ナデで調整し、内外面はハケで調整する。5・6は土師器焙烙。5はSK21、6はSK22からの出土。いずれもナデの後、体部内外面をケズリで調整。外面には煤が付着する。口縁部の形状は異なり、5の断面が三角形状であるのに対し、6は受口状を呈する。7～10は施釉陶器。SK14出土の7は、轆轤ケズリで調整され、鉄釉を二度がけし焼成された碗。8の碗底部はE-8グリッドピット1出土。高台は削り出しにより成型。内外面ともに鉄釉が施され、外面には釉垂れが認められる。9はSD26出土の鉄釉小皿。底部外面を削り出すことにより低平な高台を形成する。内外面とも鉄釉を二度がけするが、底部内面には重ね焼き痕跡が認められる。同様に10も削り出しにより高台を形成するが、断面形状がやや三角

形状を呈する。内外面とも鉄釉を二度がけする。

11～21は土師器小皿。11はB-7グリッドピット1出土。内面ナデ、外面をナデ・オサエで調整するもので、器高は5mmと扁平である。12はSK21出土。内外面ともナデ・オサエで調整する。SK22出土の13も内外面ともにナデ・オサエで調整するが、底部中央のみが意図的に丸く割られた状況を呈する。14～16はC-7グリッドピット1からほぼ完形の状態で一括出土したもの。ナデ・オサエで調整するが、16のみ底部外面からの押圧によって凸状を呈する。17は包含層出土。内面をナデ、外面をオサエで調整する。18はSK11からほぼ完形で出土した。内外面ともにナデ調整。底部は丸みを帯びる。19はSK10からほぼ完形で出土したもので、17と同様に内面ナデ、外面オサエで調整する。

SK15出土の20は歪みが大きいもので、外面には何かによる連続した圧痕が認められる。21の器壁立ち上り部分は押圧により大きく窪む。

3 研 山 遺 跡

(1) 遺 構

発掘調査の対象となったのは水路部分の2ヶ所で、県道際をA地区、宮川寄りをB地区とした。A地区では若干の遺物は出土したが、明確な遺構は確認できなかった。一方B地区では、中世末から近世にかけての土坑・溝・柱穴等の遺構を確認した。B地区は延長約50mの東西方向トレンチと、東端で直角に屈曲する延長約15mの南北トレンチで構成される。トレンチ東寄り部分の遺構密度が濃いことから、遺跡の中心部分はトレンチ東側、すなわち現在の集落に重なるものと推定できる。確認された柱穴は、掘立柱建物を構成するものも含まれると考えられるが、トレンチ調査の制約から明確にする事ができなかった。以下にB地区で確認された主な遺構の概略について述べる。

SK2 東西トレンチのほぼ中央で確認した。一部は調査区南側にひろがる。2.3×2.2m以上、深さ約0.3mの方形土坑である。土坑内では、長軸を揃えた人頭大の礫が並べられている部分と粘土塊を確認した。掘立柱建物に伴う南東隅土坑の可能性がある。

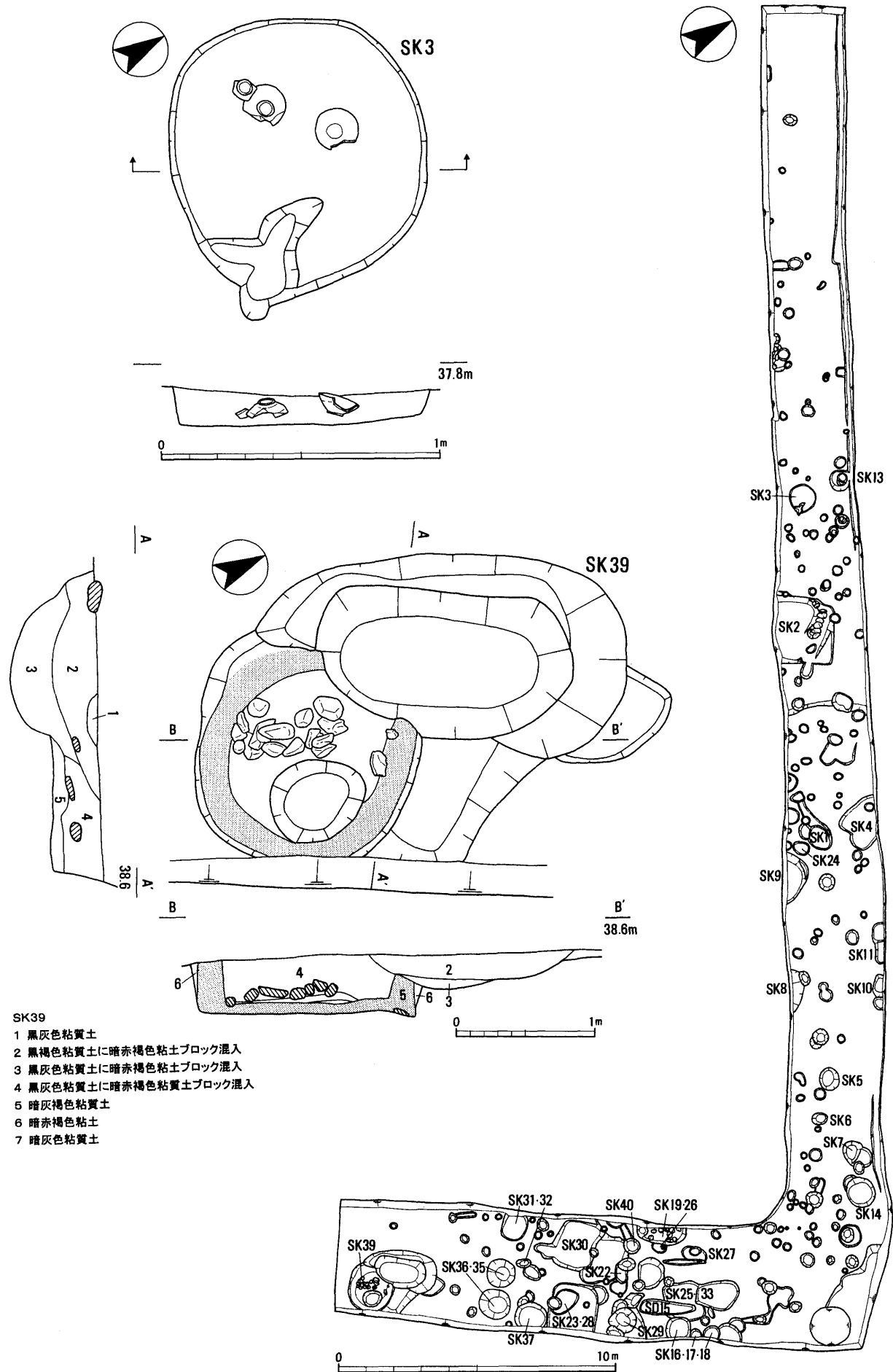
SK3 前述SK2の西側で確認した。長径約1m・深さ約0.1mの規模をもつ。埋土中から口縁部が一部欠けた山茶碗2個と高台部破片が出土した。

SK14 東西トレンチの東端、南北トレンチへの屈曲部で確認した。長径約1.2m・深さ約0.4mの円形土坑。内部で陶器大甕底部が確認されたことから、埋甕を据え置くため掘削された土坑であろう。

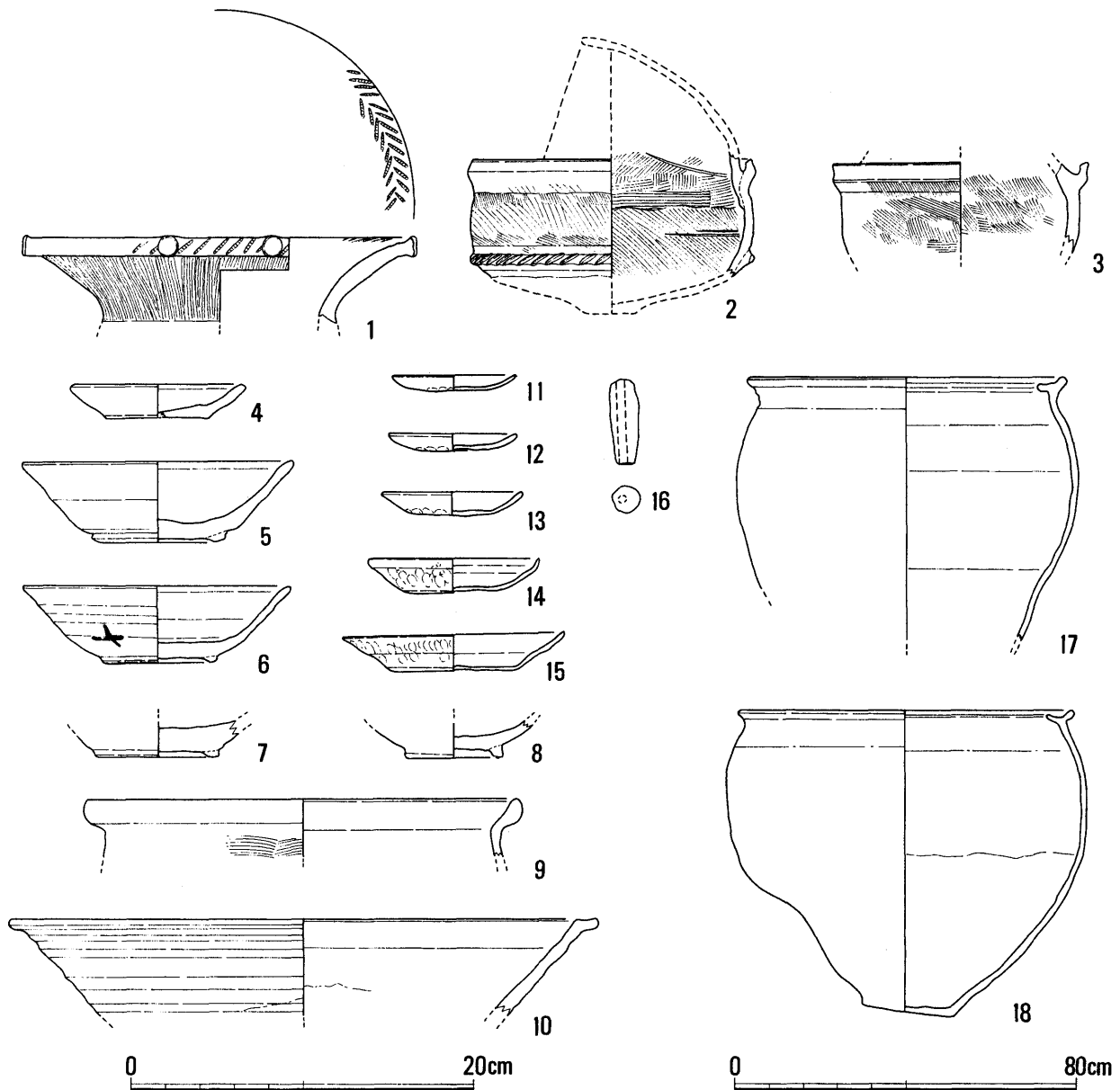
SK39 南北トレンチの南端部で確認した。径1.5m・深さ約0.3mの円形土坑。検出時、土坑壁際に幅約0.2mの暗灰褐色粘質土が帯状に確認できた。断面で観察したところ、この粘質土の帯は高さ約0.3mの土手状になること、平坦な底部にも約0.1mの厚さで貼られていることが判明した。また、土坑内には被熱痕のある礫群が投棄されていた。

(2) 遺 物

出土した遺物は、遺物整理箱に換算して1箱と少ないが、古墳時代前期初頭及び中・近世に属するものがある。ここでは主な出土遺物を提示し、その概略を述べる。1～3は古墳時代前期初頭の土器。1は広口壺の口縁部。大きく外反する口縁部は外面を縦位のハケ、内面をナデで調整。口縁端面には板状具により等間隔で斜位刺突を巡らせ円形浮文を貼付け、内面には板状具により綾杉文が施される。2の手焙形土器は鉢部口縁が受口状を呈するものである。覆部は欠損するが、口縁端部より若干下で覆部を接合する。鉢部の内外面は斜位・横位のハケで調整し、外面最大径直下にキザミを施した突帯を貼付ける。3は内外面ともハケで調整し、受口状口縁を持つ手焙形土器の小破片か。4～18は中・近世の遺物。4～6・8はSK3出土の無釉陶器。4はいわゆる山皿。体部は扁平で浅く短い。見込み部は指ナデにより窪む。5～7はいわゆる山茶碗。5は立ち上がり部の器壁が厚く口縁部に向かい徐々に厚みを減らす。体部は直線的に開き、口縁端部が若干肥厚する。また、内面は底部から体部にかけて浅く窪む。6の体部も直線的に開くが、5に比べ器壁は薄手である。外面の底部寄りに墨書されている。「十」あるいは「×」か。SK30出土の7の底部は、5・6に比べやや厚手である。これらはおおむね藤澤編年6～7型式に属するものであろう。9の土師器鍋は「く」字状に屈曲する頸部を有し、口縁端部が玉縁状を呈する。外面にはハケの痕跡が認められる。10の鉢は体部が直線的に伸び、口縁部が水平方向に屈曲する。11～15は土師器小皿。11～13は基本的に内外面ともナデ調整するが、底部から体部への変換点をオサエで調整する。14の口縁部は直立気味で、外面をオサエで調整する。15も外面をオサエで調整するが、平底から短く直線的に伸びる体部が屈曲し段状を呈するもの。16は土錘で長軸方向に穿孔される。17・18は陶器甕。17はSK39、18はSK14から出土した。17は口縁部から体部上半、18はほぼ完全な状態で出土した。口縁部は横方向に拡張され、断面の形状は「T」字状を呈する。



第9図 研山遺跡遺構平面図 1 : 200 / SK3遺物出土状況図 1 : 20 / SK39平面図・土層断面図 1 : 40



第10図 研山遺跡出土遺物 17・18は1：16、その他は1：4

4 結 語

調査では、古墳時代前期・中世から近世近世にかけての遺構・遺物を確認し、遺跡の中心はおおよそ鎌倉時代から近世にかけての時期であることが判明した。以下では調査によって得られた知見と、それに基づく若干の検討を行う。

野田遺跡 複数の掘立柱建物・土坑等の遺構を確認し、長原城跡が立地する丘陵裾から宮川に向かって緩やかに傾斜していく斜面上に、室町時代後期から近世にかけての集落が展開していたことが明らかとなった。掘立柱建物は、報告段階で6棟を確認し、特に調査区

南側では重複した状態で掘立柱建物3棟(SB37~39)を確認した。いずれも建物内の南東隅に相当する位置に方形土坑が掘削されており、土坑内では熱を受け赤色あるいは黒色に変色した複数の礫や焼土の混入した粘土質の土が確認されたことから、これらは炊事場あるいは工房等、火気を使用した施設であった可能性が高い。また、調査区南西部の柱穴(C7グリット Pit 1)からは、土師器小皿3枚がほぼ完形の状態で出土している。他に出土遺物はなく土師器小皿のみが出土していることから、祭祀等に伴い埋納されたものと推

定できる。

なお、調査区は長原城跡直下に位置することから、今回確認した遺構が同城に関連するものであるとの想定も可能である。しかし、出土遺物が少量であることから断定することは困難であったため、ここではあくまでも可能性が高いことのみ指摘しておく。

研山遺跡 A・Bの2箇所を対象に調査を実施した。県道沿いのA地区では明確な遺構を確認することができなかったが、宮川寄りのB地区の調査では土坑・柱穴等の遺構を多数確認した。野田遺跡と同様の方形土坑（SK2・25・28・30等）も複数確認しており、これらも建物南東隅に附随する施設である可能性が高い。したがって、その周辺で確認された柱穴は掘立柱建物に伴うものと考えられるが、トレンチ調査の制約から

建物を明確にすることができていない。いずれにしてもこれらの建物は、中世末から近世にかけての時期に属することは間違いないであろう。また、常滑産大甕の出土が確認されたSK14および39は埋甕を設置するための土坑である。SK39については体部下半から底部は出土していないことから、土坑底部及び側壁に貼られていた粘質土は甕本体の固定及び水漏れ等防止を意図したものと考えられる。それ以外にもSK3・30のように山茶碗が出土した鎌倉時代の遺構も確認されている。また、SK21のように手焙形土器が出土した遺構も確認され、包含層からも少量であるが当該時期の遺物が確認されており、調査地周辺の歴史は少なくとも古墳時代前期初頭頃までは遡ることが判明した。

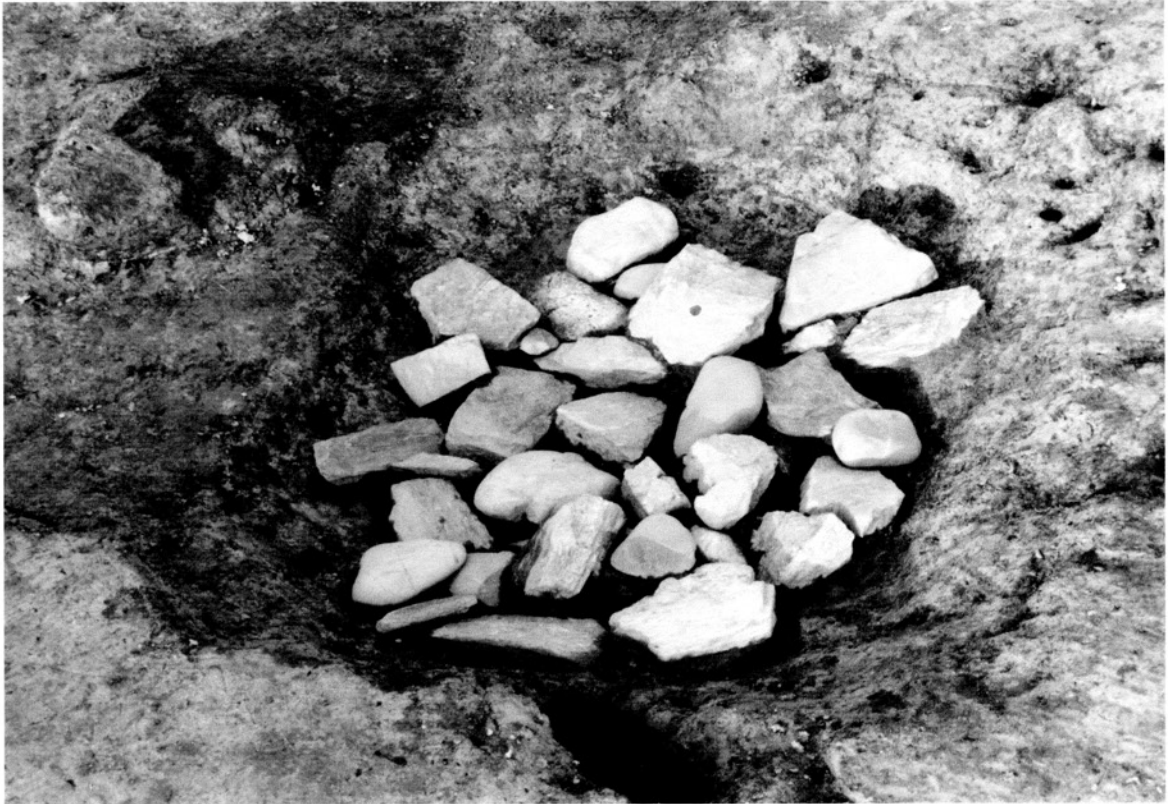
（越賀・木野本）



野田遺跡 調査後全景（北東から）



野田遺跡 SK10(北から)



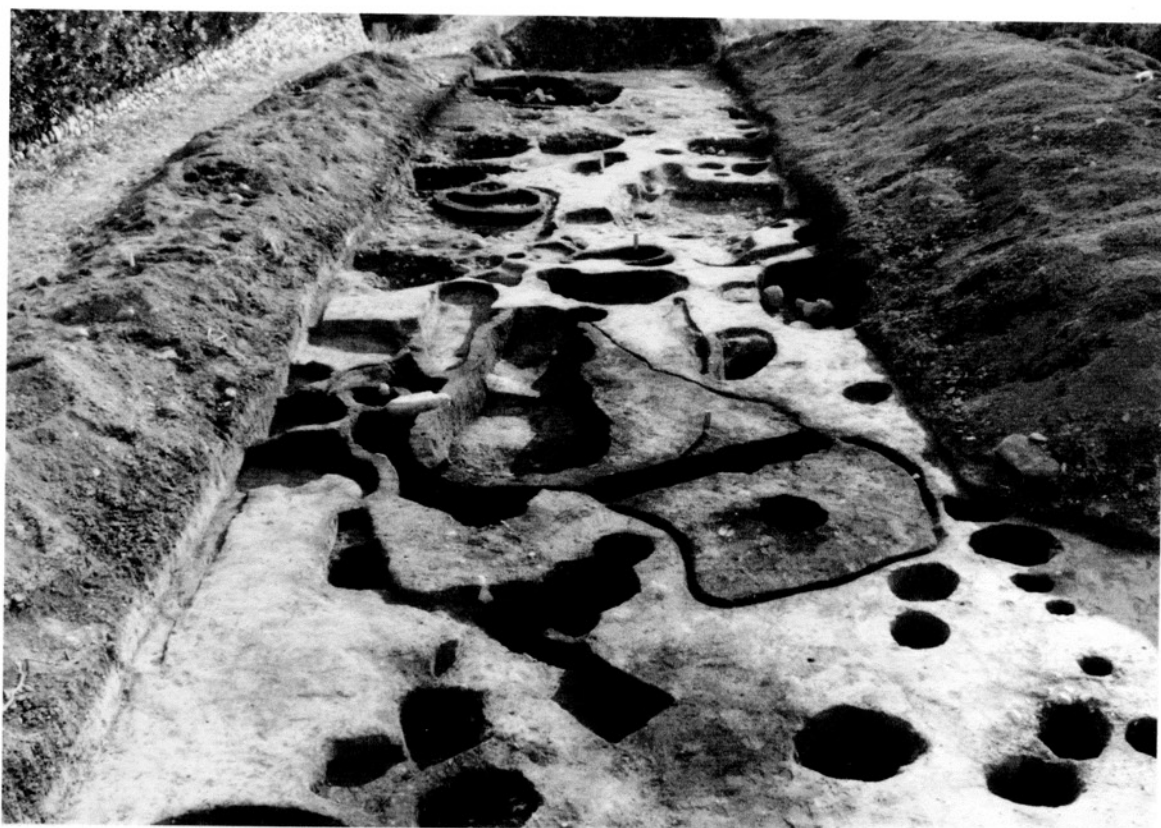
野田遺跡 S K28礫群検出状況(南西から)



野田遺跡 C7グリットPit1 遺物出土状況(西から)



研山遺跡 B地区東西トレンチ全景(東から)



研山遺跡 B地区南北トレンチ全景(北から)

図版 4



研山遺跡SK3
遺物(5・6・8)出土状況(西から)



研山遺跡SK14
埋甕底部出土状況(東から)



研山遺跡SK39
完掘後全景(東から)

IV 名賀郡青山町 西山遺跡・中出向遺跡・間所遺跡

1 位置と環境

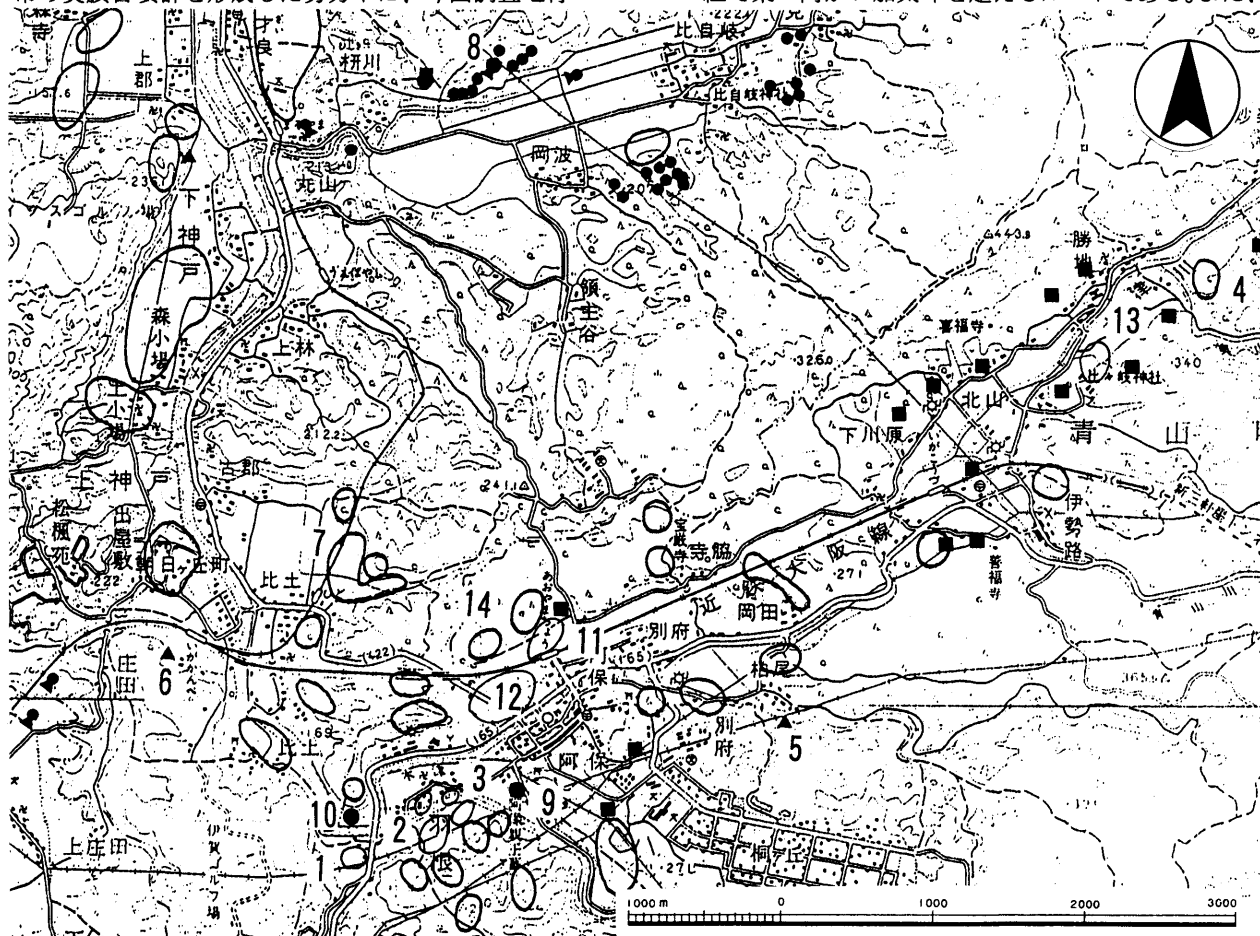
西山遺跡(1)、中出向遺跡(2)、間所遺跡(3)は、青山町の西部、木津川と前深瀬川が合流する付近に位置し、行政上はそれぞれ名賀郡青山町羽根字西山、字中出向、字間所である。

青山町では種生八王子遺跡や落とし穴が4ヵ所確認された勝地大坪遺跡(4)など縄文時代早期から確認でき、弥生時代にも柏尾(5)から銅鐸が出土し、西山遺跡北西2kmの上野市比土(6)からも銅鐸が出土することから、当然それともなう地域集団の存在が考えられる。

古墳時代に入ると、4世紀後半以降の大規模な祭祀遺跡である城之越遺跡(7)を挟み、4世紀末～6世紀前半に築造された上野市の石山古墳(8)や名張市の美旗古墳群を形成した勢力下に、今回調査地付

近の集団は属したものと考えられる。青山町域では「伝息速別命墓」(9)のほか、羽根地区や別府地区の丘陵部には多くの古墳が分布しているものの、古墳時代後期以降の群集墳と考えられ、発掘調査が実施された塚原古墳(10)や勝地大坪古墳群(11)などは6世紀後半～7世紀前半のもので、前期・中期の古墳は現時点では確認されていない。

歴史時代には畿内の東限が名壘の横河(現名張川)とされたように、伊賀国が畿内は東国の境として認識されていた。当然ここには、畿内と東国を結ぶためのいくつかの主要陸路が通過する。その1つは壬申の乱の際に大海人皇子が美濃国をめざしたルートで、畿内から伊賀国へ出て北上し、後の伊賀国府を経て東へ向かい加太峠を超えるルートである。また、



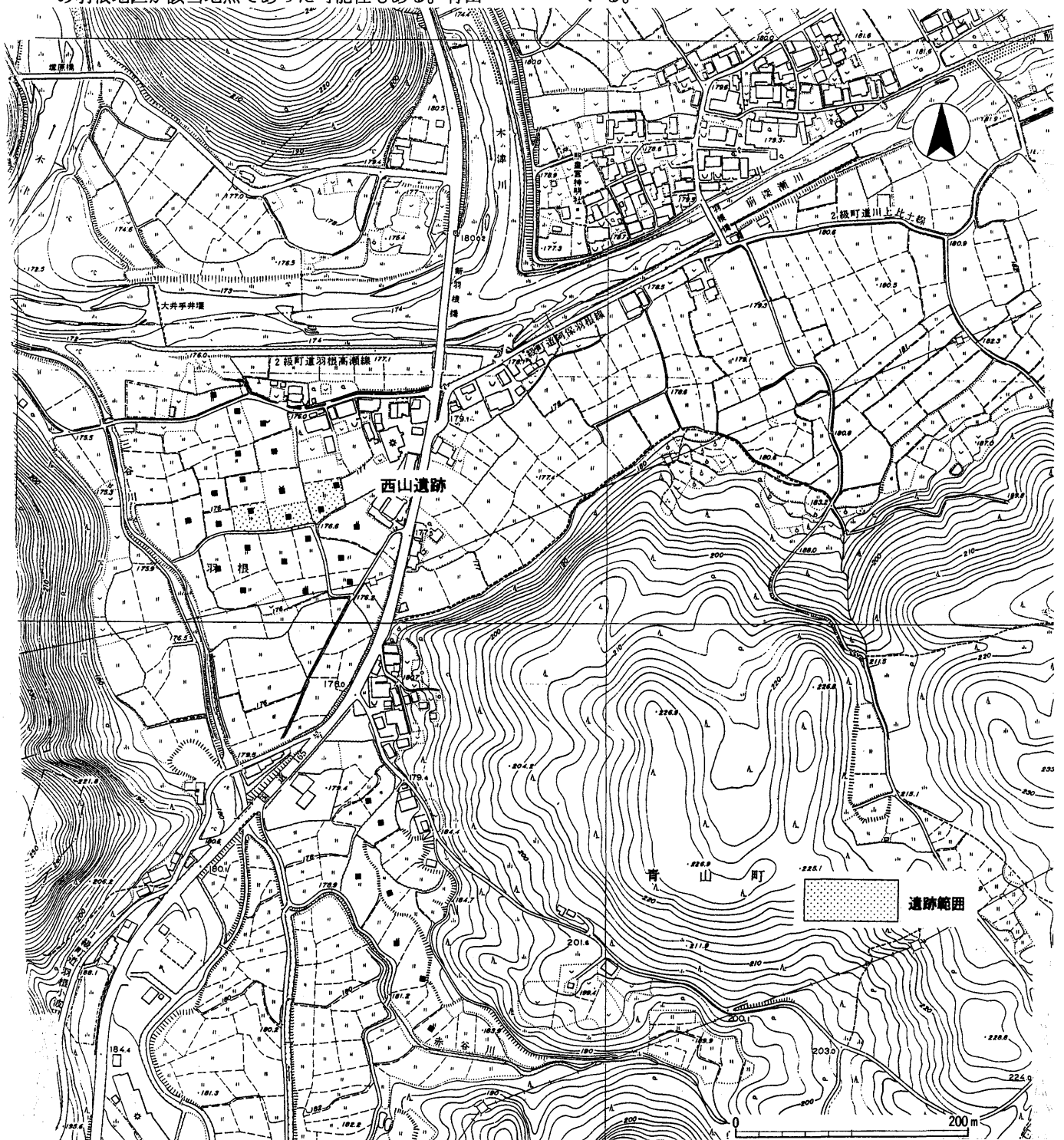
図中 ▲は銅鐸出土地 ●は主要な古墳 ■は主な中世城館

第1図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院1:50,000地形図『上野』『名張』より抜粋)

持統天皇の伊勢・志摩行幸や聖武天皇の東国行幸、さらには飛鳥期の斎王群行がたどった青山峠越えのルートがある。あるいは、現在の国道165号がある程度原東海道と重なると想定されることから、畿内～伊賀国南部の経路から、伊賀国府方面と伊勢方面の分岐地点が青山町域であったとも考えられ、その場合には、木津川が方向を北に変える今回調査地点の羽根地区が該当地点であった可能性もある。青山

町内の飛鳥・奈良時代の遺跡としては七ヶ城遺跡⁴(12)や沢代遺跡⁵(13)などで発掘調査が実施されている。

平安時代後期には藤原実遠が伊賀国に広大な荘園を有していた。青山町羽根地区はそのうちの中津阿保村に含まれていたと考えられる。青山町内では川南A遺跡⁶(14)や椈ヶ森遺跡⁷(15)の調査が実施されている。



第2図 遺跡地形図 1 : 5,000

図中 ■は平成8年実施の試掘坑

中世後期の伊賀地方は多くの機会⁸で説明されているように、藤原氏・東大寺・興福寺等古代後半～中世前期に勢力を持った荘園領主が衰退した後、在地勢力が台頭し、伊賀一国を支配する守護大名や戦国大名の出現を許すことはなかった。伊賀国内には500を越える中世城館が確認されており、青山町域でも木津川沿いに多くの城館を構え、近年の調査では47の中世城館が確認されている⁸。

【註】

1 吉沢 良 「勝地大坪遺跡・勝地大坪古墳群」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告―第1分冊―』三重県埋蔵文化財センター 1992

2 仁保晋作『塚原古墳発掘調査報告』青山町教育委員会 1982.

3 註1に同じ

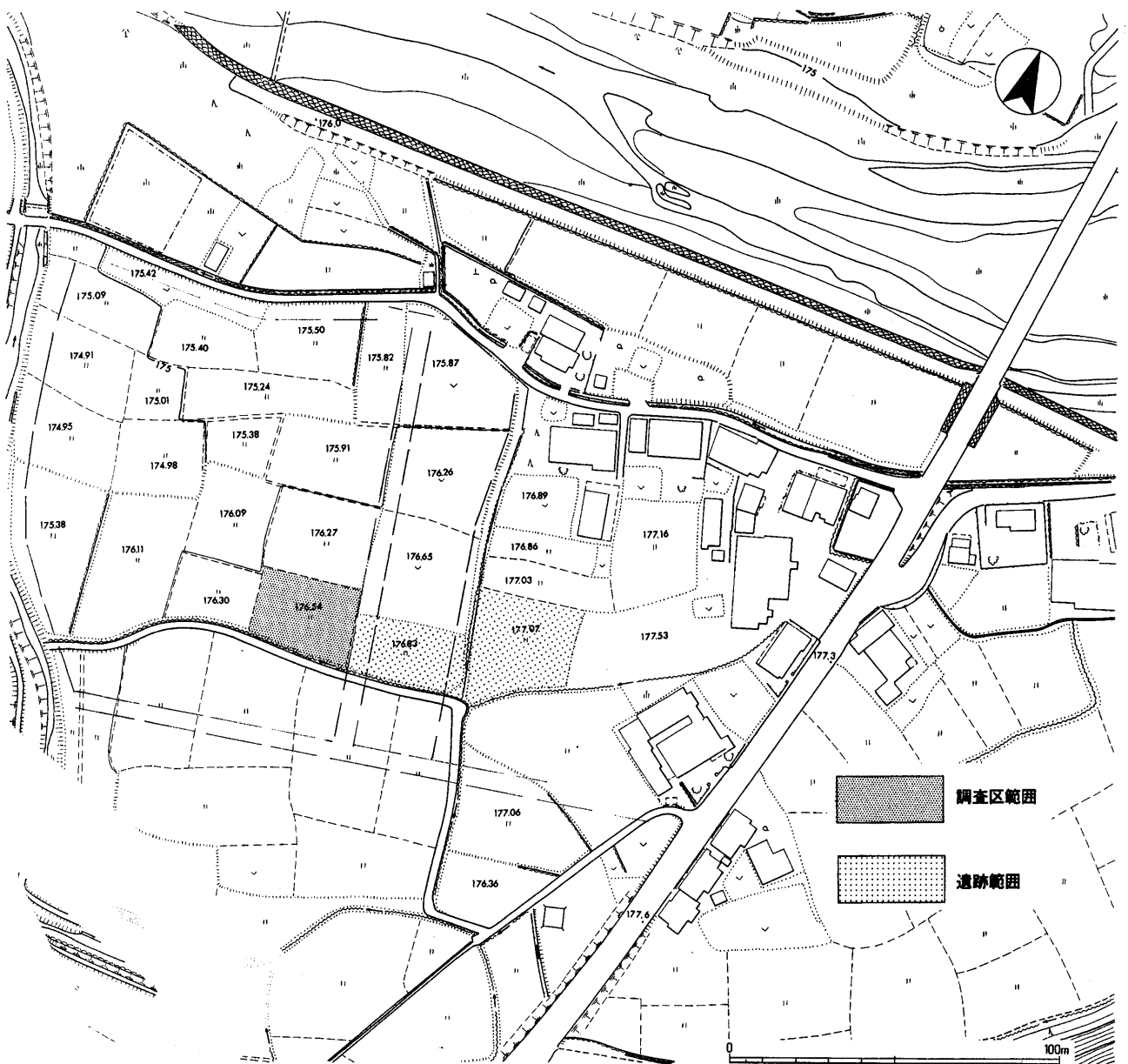
4 境 宏『七ヶ城遺跡・七ヶ城古墳群 椋ヶ森遺跡調査報告書』青山町教育委員会・青山町遺跡調査会 1995

5 境 宏『沢代遺跡調査報告書』青山町教育委員会・青山町遺跡調査会 1995

6 吉沢 良「川南A遺跡」『伊賀国府跡・箕升氏館跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1993

7 註4に同じ

8 『青山町の文化財』青山町教育委員会 1991



第3図 西山遺跡 調査区位置図 1 : 2,000

2 西山遺跡

(1) 層序

今回調査地点の現況は、木津川に前深瀬川が合流する地点の左岸に広がる水田で、標高は 176.0m前後である。

調査区の基本層序は、耕作土及び床土の下に暗褐色土(シルト質)、灰黄色土(シルト質)、暗灰褐色土等が続いた後、暗褐色土の包含層が厚さ 0.1m程度に至り、暗灰黄色土の遺構検出面に至る。耕作土上面から遺構検出面までは、概ね 0.7~1.0mである。

(2) 遺構

今回調査で確認した主な遺構は、平安時代の掘立柱建物や土坑である。なお南北溝状のものが数条あるが、地形の凹凸によるもので、遺構ではない。

柵

SA29 調査区西端D6・7グリッドで検出した、2間分 4.0mのもので、柱間は 2.0m、主軸が N11° E である。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は 0.3 程度で、深さは 0.9~1.0mである。



第4図 西山遺跡 遺構平面図 1:200

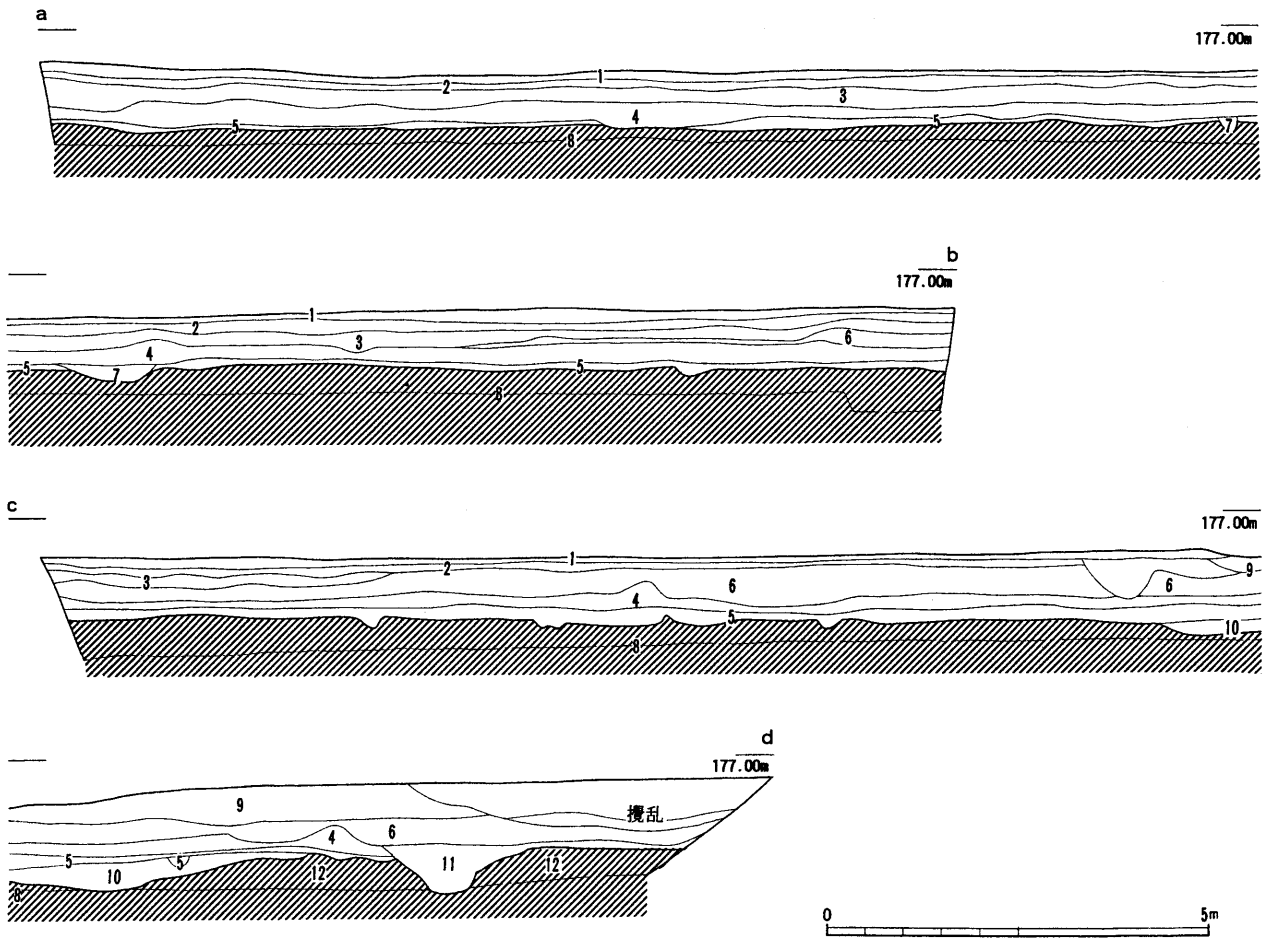
掘立柱建物

S B21 調査区南東部 I 9～J 10 グリッドを中心に検出した。規模は3間×3間の総柱建物で、桁行き6.2m、梁行き5.6m、棟方向がN72° Eの東西棟である。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.2～0.5mでほとんどは0.3m前後、深さは0.4m～1.7mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが西から2.0・2.1・2.1m、梁行きが3間ともに1.85mである。土師器、ロクロ土師器、黒色土器が出土した。

S B22 調査区北東部 I 9～J 7グリッドを中心

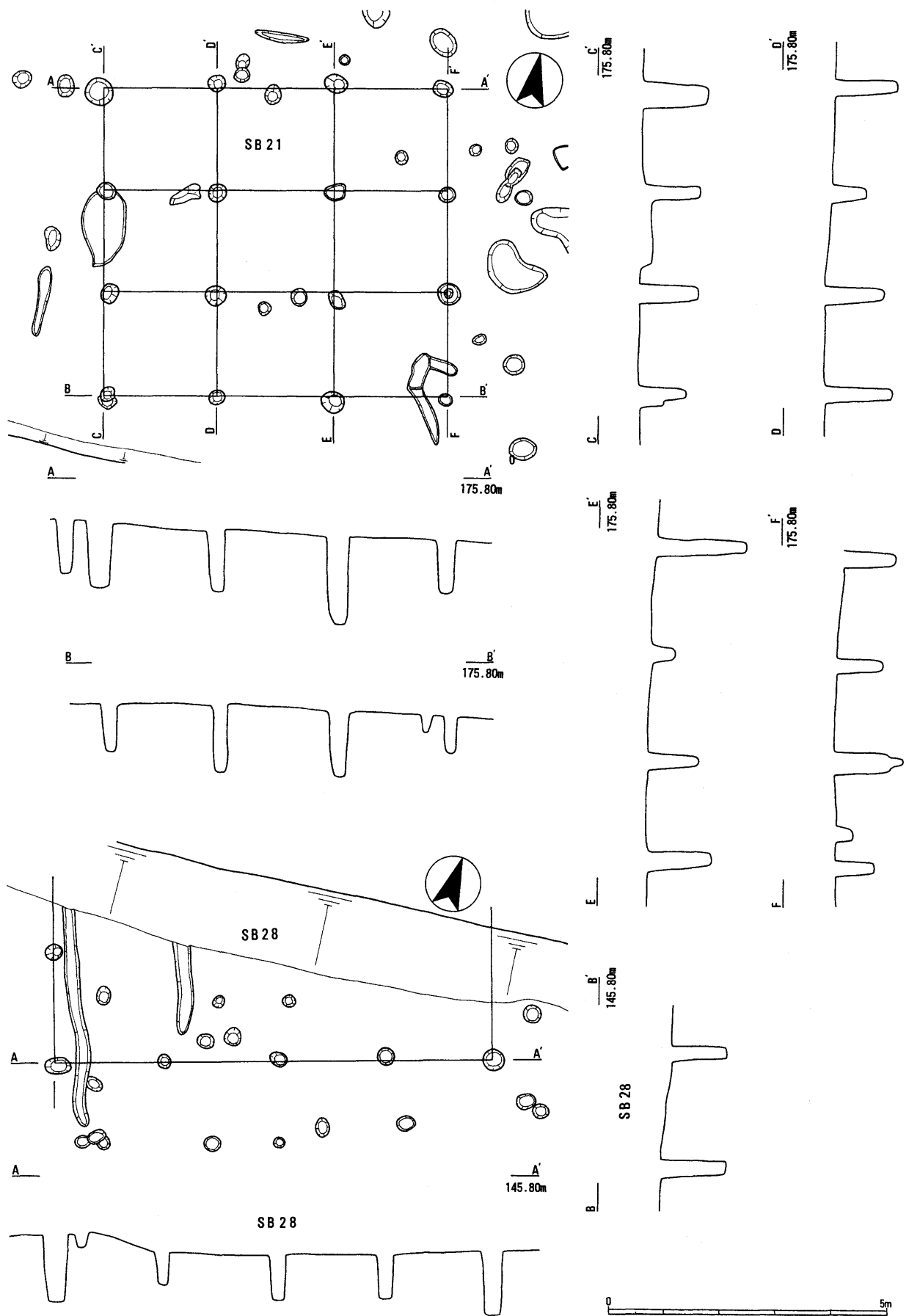
に検出した。規模は2間×2間、一辺4.0mの正方形の建物で、棟方向はN20° Wである。遺存する柱穴の平面は円形を呈し、直径は0.2～0.3m、深さは0.6m～1.4mだがほとんどは0.8m前後である。柱間はともに2.0mである。土師器皿、黒色土器が出土した。

S B23 調査区北東部 I 5～J 7グリッドを中心に検出した。規模は3間×2間の総柱建物で、桁行き5.6m、梁行き3.8m、棟方向がN18° Wの南北棟である。遺存する柱穴の平面は円形を呈し、直径は0.15～0.4mでほとんどは0.2m前後、深さは0.7m

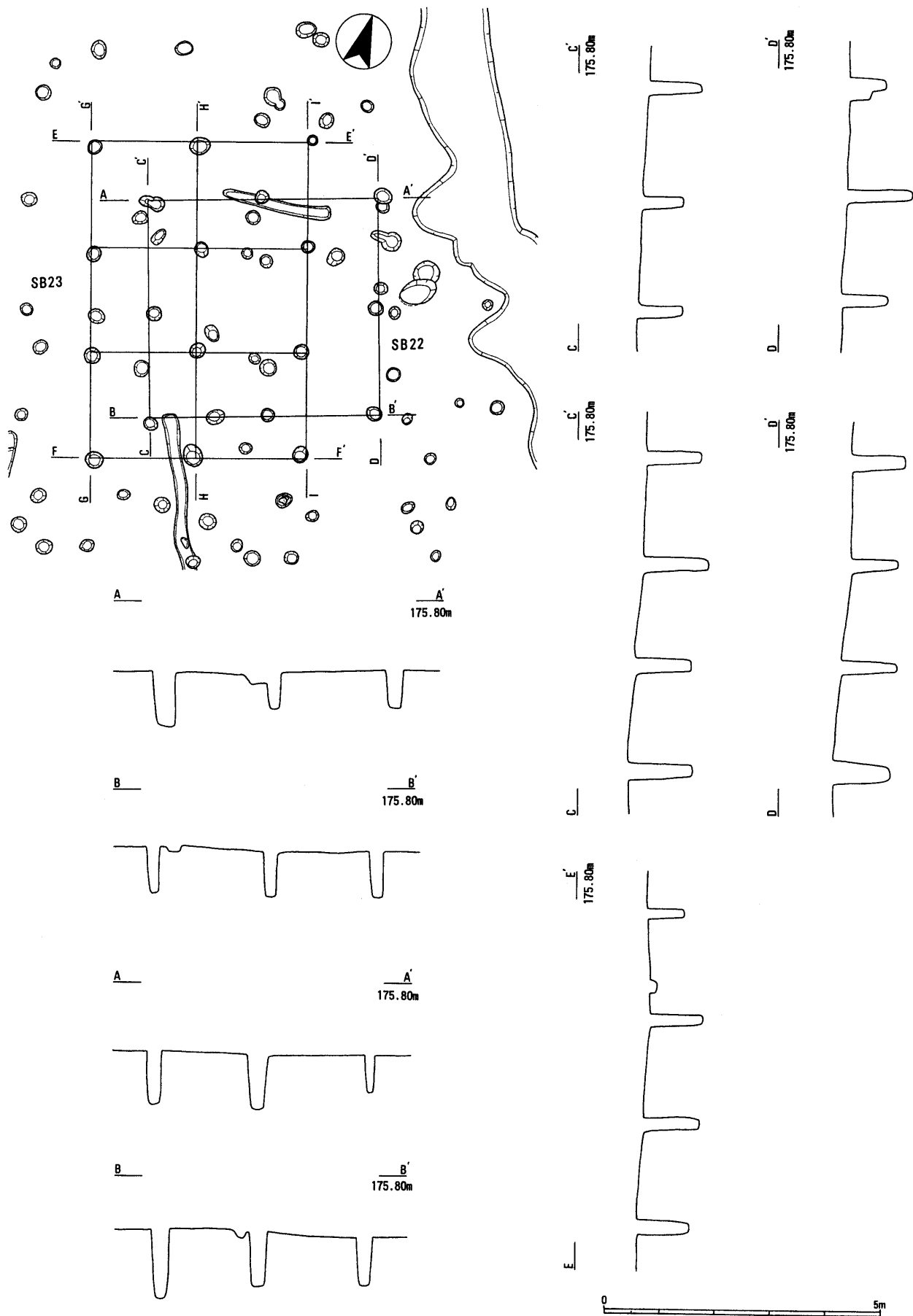


- | | |
|--------------|---------------|
| 1:耕作土 | 7:暗茶褐色土 |
| 2:床土 | 8:暗灰黄色土(シルト質) |
| 3:灰褐色土(シルト質) | 9:表土 |
| 4:暗灰褐色土 | 10:暗茶色土 |
| 5:暗褐色土(包含層) | 11:黒褐色土 |
| 6:灰黄色土(シルト質) | 12:灰黄色砂層 |

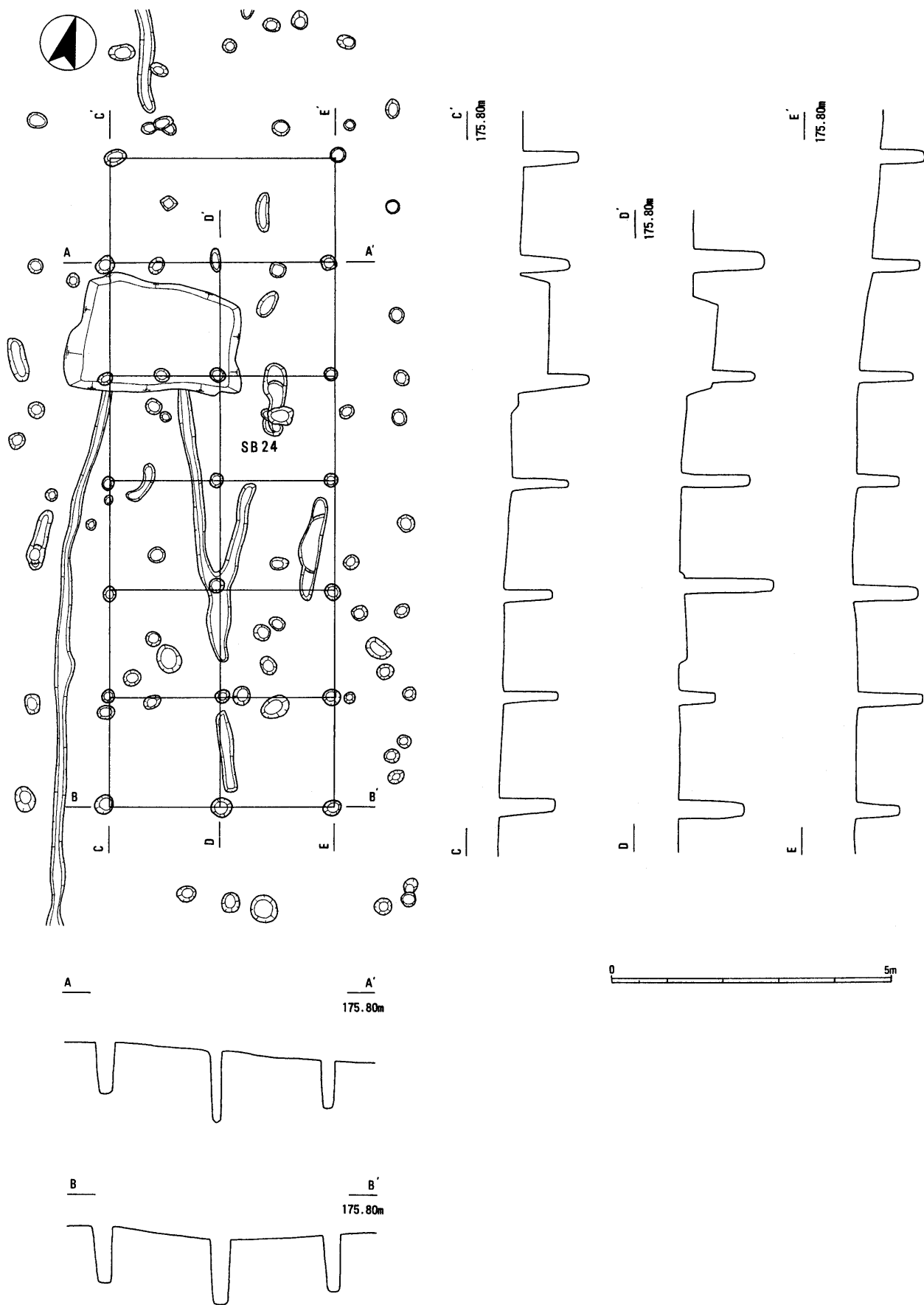
第5図 西山遺跡 土層断面図 1 : 100



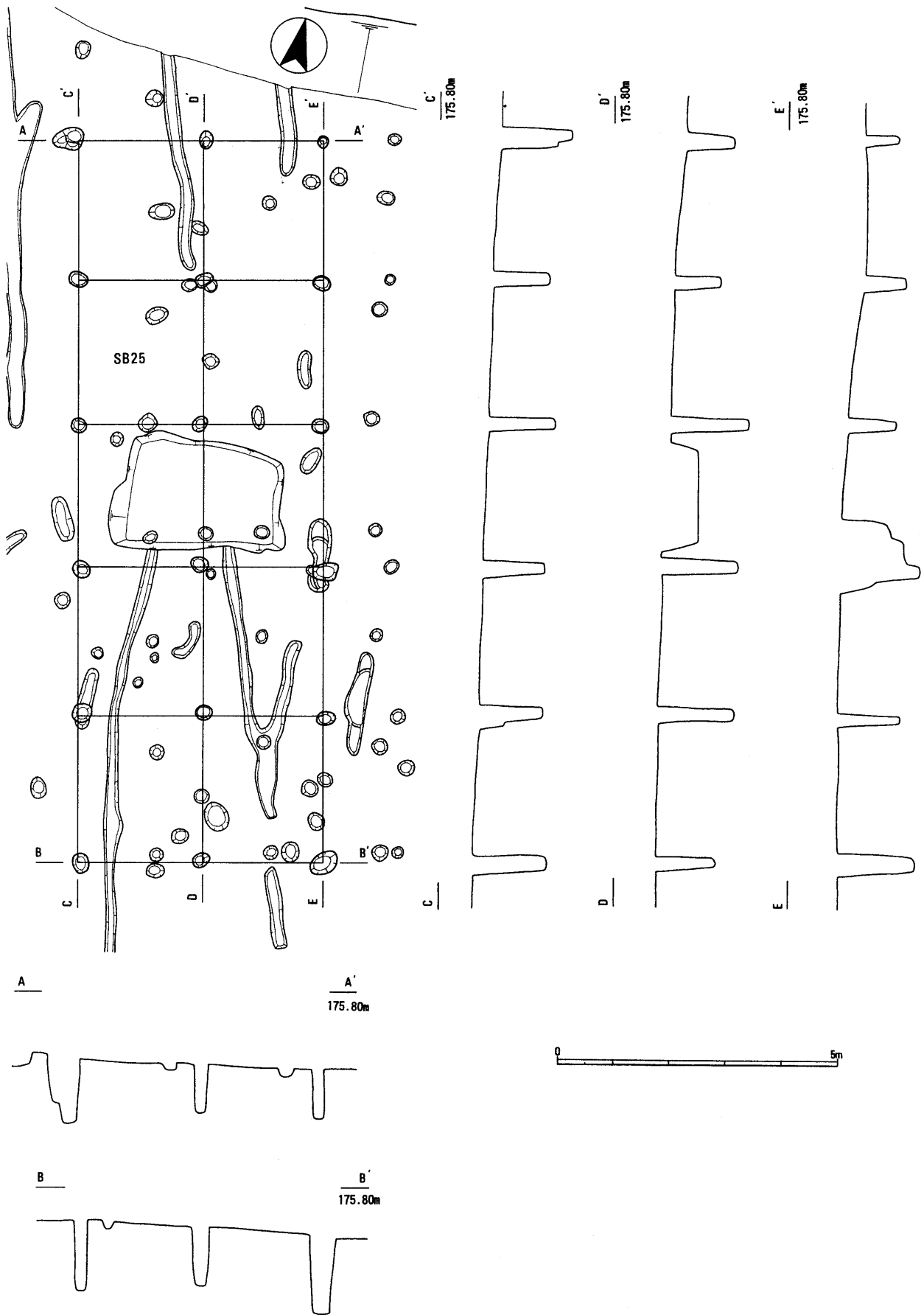
第6図 西山遺跡 遺構実測図1 1:100 SB21・28



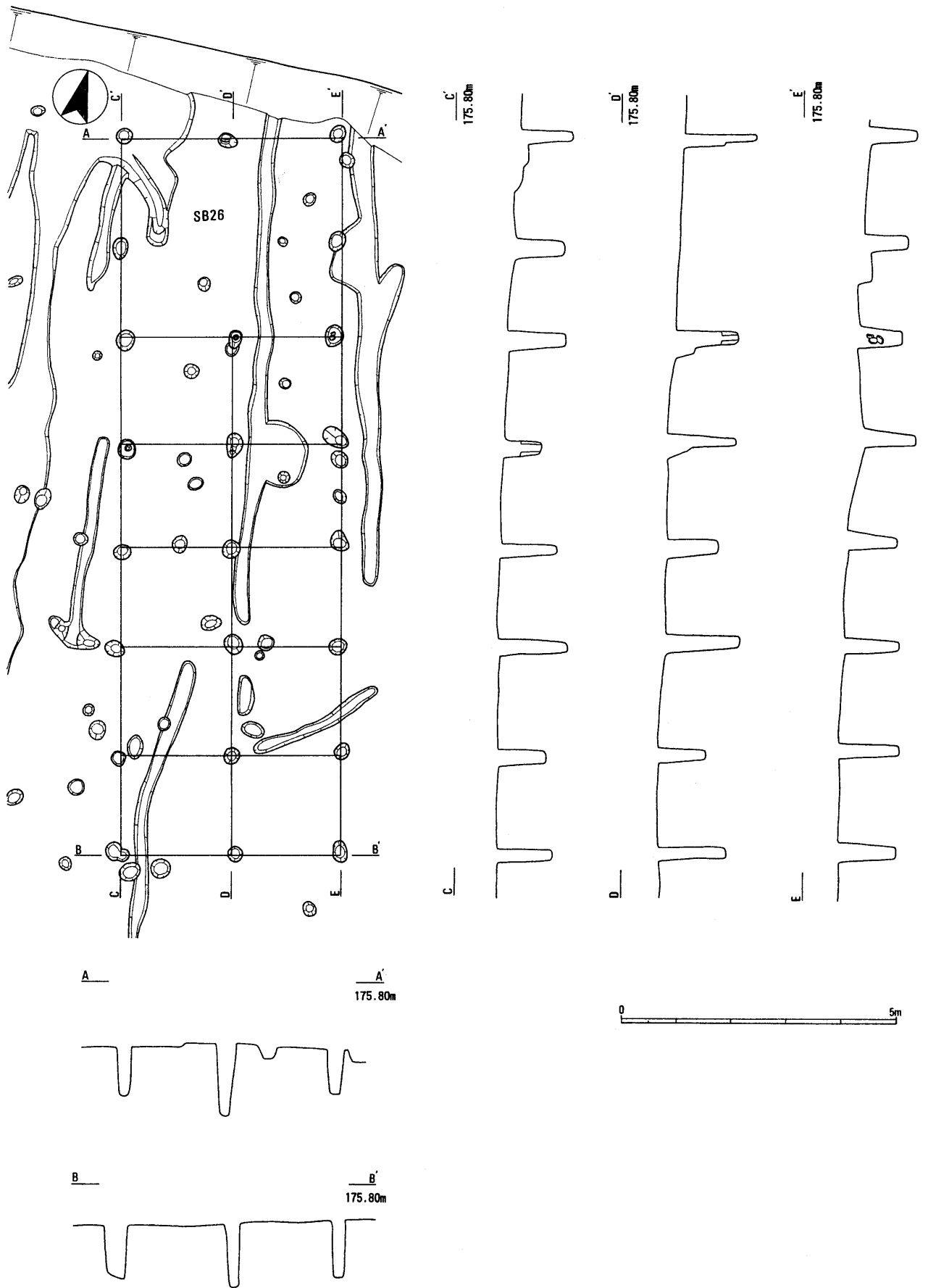
第7図 西山遺跡 遺構実測図2 1:100 SB22-23



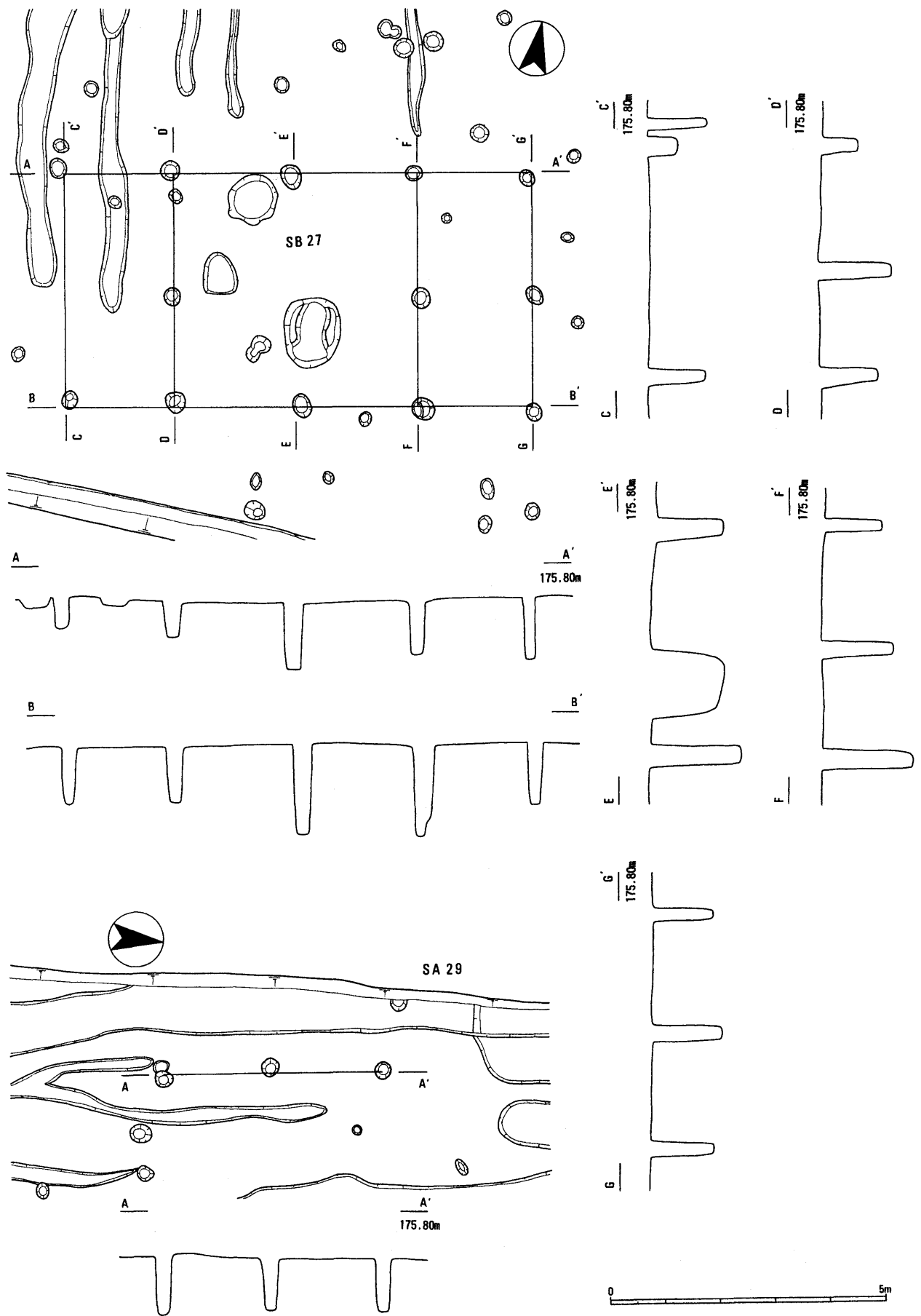
第8図 西山遺跡 遺構実測図3 1:100 SB24



第9図 西山遺跡 遺構実測図4 1:100 SB25



第10图 西山遗址 遗构实测图5 1:100 SB26



第 11 図 西山遺跡 遺構実測図6 1 : 100 SB27・SA29

～1.1mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが北から1.9・1.8・1.9m、梁行きが2間ともに1.9mである。土師器皿、黒色土器碗等が出土した。

SB24 調査区中央部G6～H8グリッドを中心に検出した。規模は6間×2間の総柱建物で、桁行き11.5m、梁行き4.0m、棟方向がN16°Wの南北棟である。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.2～0.4m、深さは0.7m～1.7mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが北から1.8・2.0・1.9・1.9・1.9・2.0m、梁行きが2間ともに2.0mである。土師器皿、黒色土器が出土した。

SB25 調査区中央部G5～H8グリッドを中心に検出した。規模は5間×2間の総柱建物で、桁行き12.9m、梁行き4.4m、棟方向がN15°Wの南北棟である。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.2～0.4m、深さは0.6m～1.5mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが北から2.5・2.6・2.6・2.6・2.6m、梁行きが2間ともに2.2mである。土師器皿が出土した。

SB26 調査区北西部E5～G7グリッドを中心に検出した。規模は7間×2間の総柱建物で、桁行き13.0m、梁行き4.0m、棟方向がN17°Wの南北棟である。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.25～0.5m、深さは0.8m～1.4mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが北から2.0・1.7・1.9・1.9・1.8・1.9・1.8m、梁行きは2間ともに2.0mである。土師器皿や黒色土器碗などが出土した。

SB27 調査区南西部D8～G9グリッドを中心に検出した。規模は2間×2間で、桁行き4.4m、梁行き4.2m、棟方向がN79°Eの東西棟の身舎に、東西2面に庇が設置される。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.2～0.4m、深さは0.6m～1.5mだが1.0前後のものが多い。柱間は桁行きが北から2.5・2.6・2.6・2.6・2.6m、梁行きが2間ともに2.2mである。土師器皿が出土した。

SB28 調査区北部G4～I5グリッドで、南面の東西4間分8.0m、西面の1間分2.0mを検出した。南面の柱間は2.0mで、棟方向はN18°Wである。遺存する柱穴の平面は概ね円形を呈し、直径は0.3～0.4m、深さは0.6m～1.5mである。調査区北方向に続くものと思われる。

土坑

SK8 調査区南西部F9グリッドで検出した。平面楕円形を呈し、径は1.0～1.3m、深さは0.4～0.5mである。土師器皿が出土した。SB27に伴うものか。

SK10 調査区南西部D8・9グリッドで検出した。平面楕円形を呈し、径は0.9～1.0m、深さは0.5mである。土師器皿が出土した。SB27に伴うものか。

(3) 遺物

今回調査で出土した遺物は、平安時代後期のものが中心である。

SK8出土遺物

1・5は土師器皿である。1は復元した推定の口径が8.2cm、器高は1.3cm。3は復元した推定の口径が9.2cm、器高1.2cm。ともに口縁部はヨコナデで外弯させた後口縁端部を上部へつまみ出す。口縁部は内外面ともヨコナデを、底部内面はナデ、底部外面はオサエ・ナデが施される。

SK10出土遺物

2は土師器皿で復元した口径は8.5cm、器高1.4cm。口縁部はヨコナデで外湾させた後口縁端部を上部へつまみ出す。口縁部は内外面ともヨコナデを、底部内面はナデ、底部外面はオサエが施される。

SB26出土遺物

土師器皿 2は推定の口径が9.4cm、高さ1.3cmで、口縁部を外弯させ、口縁端部を上方につまみ出す。4は推定の口径9.4cm、高さ1.3cmで口縁部を下方へ屈曲させ、口縁端部を内側へ折返す。ともに口縁部は内外面ともヨコナデを、底部は内面ナデを、外面オサエを施す。14・15は口縁部のみの出土で、14は推定口径16.0cmで、口縁部を外方向に緩やかに立ちあげた後横方向へ折り曲げ端部を上方に立ちあげるもの、15は径16.2cmで、2点とも口縁部内外面をヨコナデ、底部内面にナデ、外面はオサエが施される。8・16は底部で、8は径8.1cmの、16は径8.6cmの断面ハの字状の高台が貼付けられる。底部内外面はナデを高台部分はヨコナデが施される。ロクロ土師器皿 高台を貼りつけるもの(6・7)、柱状の高台を持つもの(9～11)がある。6は口径9.9cm、高2.1cmで、口縁部を内弯させ口縁端部を上方につ

まみ出す。7は口径9.7cm、高さ2.4cmで、ほぼ水平の底部に口縁端部を内側に折返す。6は径6.1cmの、7は径5.5cmの高台を貼りつける。9は口径8.0cm、高さ3.2cm、10は口径8.2cm、高さ3.0cm、11は口径8.8cm、高さ2.4cmでいずれも柱状の高台と皿部を回転ナデで接合させる。高台底部には糸切痕が認められ、10には板跡も認められる。12・13は底部で12は径6.4cmの、13は径6.4cmの、ともに柱状の高台部で底部はヘラ切り痕が認められる。

土師器壺 7は口縁部で推定口径19.4cm、口縁端部を横方向へつまみ出す。

これらSB26出土遺物は平安京Ⅱ～Ⅲに該当すると思われる。

ピット出土の遺物

土師器皿 18～21・23は口径12cm前後のもので、18は口縁部、底部ともナデを、口縁端部にヨコナデをほどこすもの、19・20・21は底部および口縁部の内面はナデを、外面はオサエを、口縁端部はナデを施す。20は口縁部を途中横方向へ折り曲げるものである。23は底部および口縁外面はオサエを、内面は工具でナデを施しハケメ状の痕跡が認められ、口縁端部にヨコナデを施す。22は口径15.5cm、高さ3.4cmで口縁部および底部内面はナデを、外面はオサエを施す。口縁端部を2度強いヨコナデを施すため、口縁部外面上部に沈線状のものが1条巡る。

土師器碗 24は口径12.4cm高さ4.1cmで底部内外面はナデを、口縁部内面はナデを、外面はミガキが施される。

黒色土器碗 推定口径は25が13.6cm、26が13.3cm、27が15cmで、いずれも内面黒色のA類のものである。27は口縁内外面にミガキが認められ、口縁端部には1条の沈線が巡る。28は底部のみで径8.2cmの高台が貼りつけられる。25・26は10世紀後半、27は10世紀前半か。

ロクロ土師器皿 29は口径14.0cm、高さ2.8cmで、底部外面に糸切痕が認められる。

ピットから出土した遺物は、24が若干さかのぼるものの、その他は概ね10世紀後半のものと思われる。

包含層出土の遺物

土師器皿 30は推定口径9.5cmで、口縁を横方向に伸ばし、端部を上方につまみ出すもの、32～35は口

径12.0cm程度のもので、32・33は底部および口縁内面は工具によるナデが施される。34は底部内面および口縁内外面は回転ナデを、底部外面には回転ケズリを施す。35は底部内面および口縁内外面にナデを、口縁端部はヨコナデを、底部外面はオサエを施す。39は底部で径5.4cmの高台が貼りつけられる。

ロクロ土師器 31は径9.8cmのもので、底部外面はヘラ切り痕が認められる。

土師器碗 口径12.5cm、高さ3.5cmで内面はナデが、外面はオサエが、口縁端部はヨコナデが施される。

黒色土器碗 37・38は口縁部で37は推定口径13.9cm、38は17.0cmで口縁端部を横方向へ伸ばすもの、40・41は底部でいずれも高台が貼りつけられる。すべて内面黒色のA類である。

土師器壺 42は推定口径22.0cmで、口縁部が外方向に屈曲し、口縁端部を上方向に伸ばす。大部外面には縦方向のハケを、内面は工具によるナデを、口縁部はヨコナデを施す。

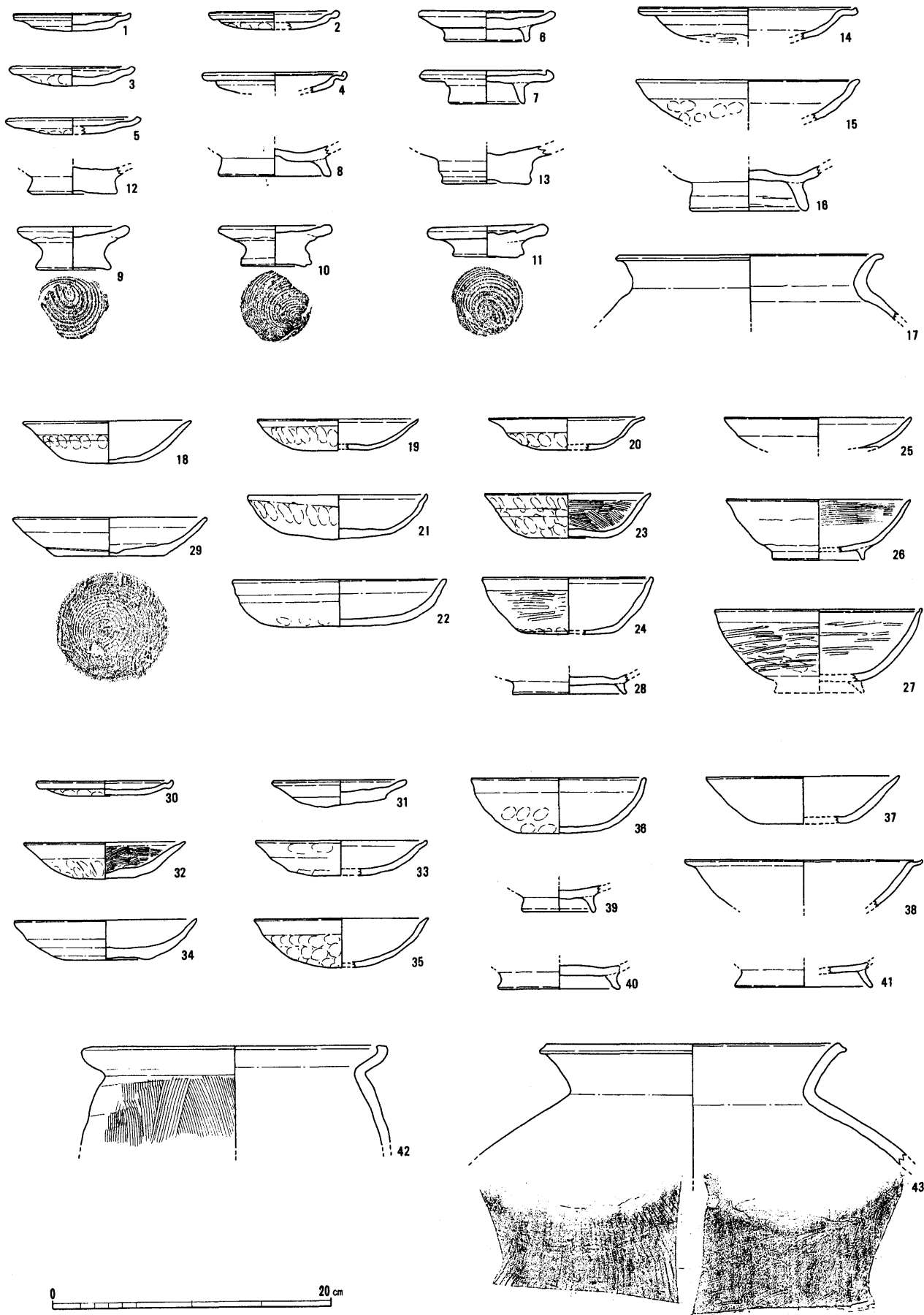
須恵器壺 43は推定口径22.0cmで、口縁部は回転ナデを施し、体部外面にはタタキが、内面にはあて具痕が認められる。

包含層からは43が奈良時代の、36・42が平安前期の他は概ね10世紀後半のものを中心にした遺物が出土した。

(3)まとめ

今回検出した8棟の掘立て柱建物は、出土する遺物から、ほぼ同時代のものと思われるが、建物の重複が多い。特にSB22～26の検出場所には他にも多数の柱穴が確認されており、今回想定した数以上の建物が建築された可能性もある。これら建物にまともななかった柱穴から出土する遺物も、ほぼ同時期であり、この場所では短期間に何度か建替えが行われたものと考えられる。

また、棟方向からSB22～26のグループとSB21・27のグループとに分かれる。この2つのグループは建物の形でも差が認められ、また同時に存在した可能性も大きいので、棟方向の違いはその使用目的が異なっていた結果とも考えられる。前述の重複状況も勘案すれば、SB22～26のグループの建物は短期間に建替えをするのに対し、SB21・27は比較



第12图 西山遺跡 遺物実測図 1:4

的長時間使用するための建物とも考えられる。
 当地が前深瀬川と木津川の合流地点に近接すること、
 いわゆる原東海道沿いにあり場合によっては伊賀を
 南北に結ぶ主用路が交差する地の可能性がある交通

の要所に位置する。

このことから、これらの建物が官立的な性格を有
 す可能性も有る。

3 中出向遺跡

(1) 遺構

調査地点は木津川と前深瀬川の合流地点から東方
 約 400mの、丘陵裾部にあり、現況は水田で標高は
 185.20mである。調査地点南方には 25 基の古墳が確
 認されている、中出向古墳群が広がる。

層序は耕作土除去後、その直下が黄褐色土の遺構
 検出面となる。

便宜上西から A・B・C の 3 地区と、後日 B 地区
 と C 地区の南に拡張した部分を D 地区とする、合計
 4 地区の調査区を設定した。

調査の結果、中出向遺跡としては、中世の掘立
 柱建物・柵・溝を確認した。また、古墳の周溝跡を

確認したことから、中出向 26 号墳とした。

中世の遺構

柵・掘立柱建物

SA11 B地区中央西よりで、東西の2間分 4.2
 mを検出した。柱間は 2.1mである。柱穴の平面形
 は楕円形で、径 0.3m、深さ 0.4~0.3mである。

SB10 B地区中央西よりで確認したもので東西
 2間分 4.4m、南北1間分 2.0m分を検出した。東西
 の柱間は 2.2mである。柱穴の平面形は楕円形で、
 径 0.2~0.4mである。

溝

SD3 B地区ほぼ中央で確認した溝で、西端から
 東流した後、北へ方向を変え南流する、幅 0.6~0.3



第 13 図 中出向遺跡 遺跡地形図 1 : 5,000

mで、東西5.0m、南北3.5m分を確認した溝である。SB10に関連するものか。瓦器碗・皿、土師器皿の中世の遺物が出土した。

中出向26号墳 B地区東端、C地区のほぼ中央部およびD地区中央部で周溝跡を確認した。遺存する部分は幅1.8m~1.0mの、深さは0.3~0.1m程度で、D地区の周溝埋土から円筒埴輪片が出土する。周溝跡からは、径(周溝内側下端を計測基準とする)約13.0mの円墳と思われる。今回調査区南部の丘陵には中出向古墳群として、既に25基が確認され、地形的には同一尾根上に位置することから、同古墳群の26号とした。古墳範囲と想定される部分や周溝埋土上層部(第10層)からは奈良時代の遺物が出土することから、奈良時代以前に開墾などの理由で、26号墳の墳丘部分は削平を受けたものと思われる。出土する埴輪もその際周溝に転落したものと考えられる。また、埋葬施設があったと思われる部分は深く掘削されており、遺存する周溝の最深部より0.5m程度深いものである。出土遺物からは5世紀後半に築造されたものと思われる。

(3) 遺物

SD3出土遺物

瓦器碗(1・3) 1は口径15.6cm、高さ5.2cmで、高

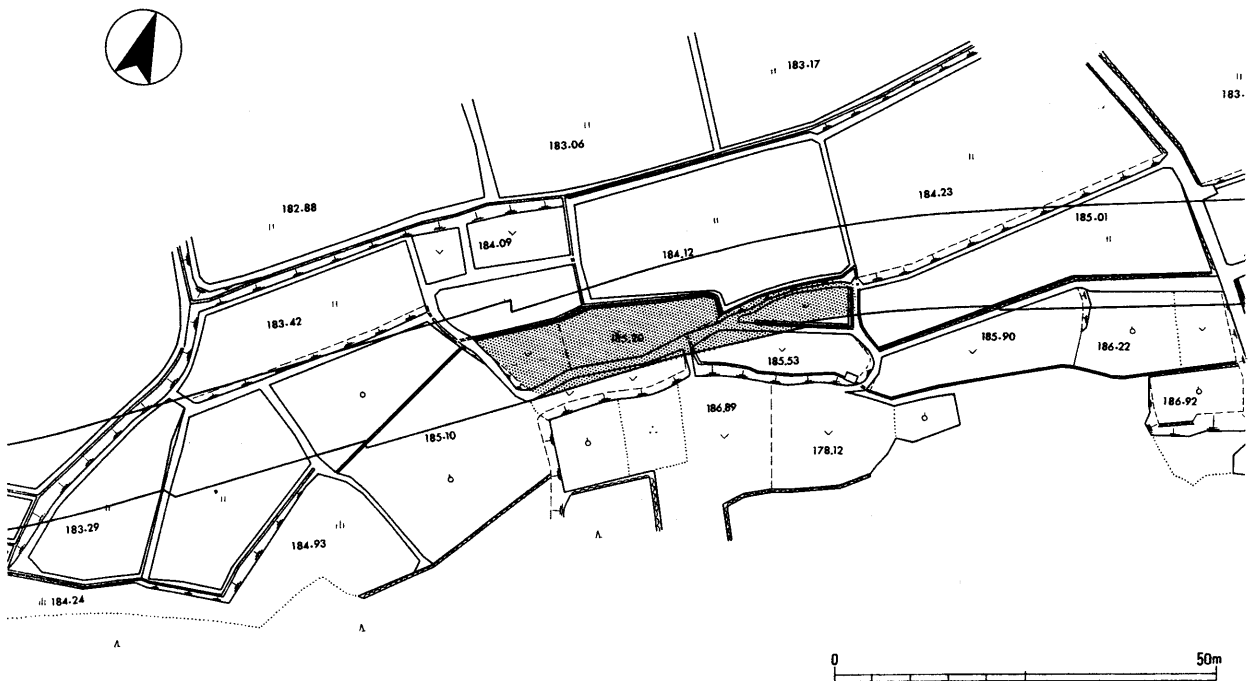
台は径6.7cm高さ1.0cmの貼付高台である。体部内面は全体にミガキが施され、底部内面には荒く螺旋状の暗文が認められる。口縁部外面には荒いミガキが、底部外面はオサエが施される。口縁端部上端に1条の沈線が巡る。3は口径15.0cm、高さ4.5cm、高台は径5.8cm、高さ0.5cmの貼付高台である。遺存状態が悪いが、ミガキの痕跡が認められる。口縁端部上端に1条の沈線が巡る。1は山田猛氏の伊賀の瓦器編年Ⅱ形式1段階に、3はⅢ形式1段階に相当する。

瓦器皿(2) 口径10.5cm、器高2.1cmで、口縁内面には密にミガキが施され、底部内面のジグザグ状の暗文も密である。口縁端部から外面にかけてはヨコナデが、底部外面にはオサエが施される。

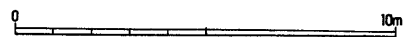
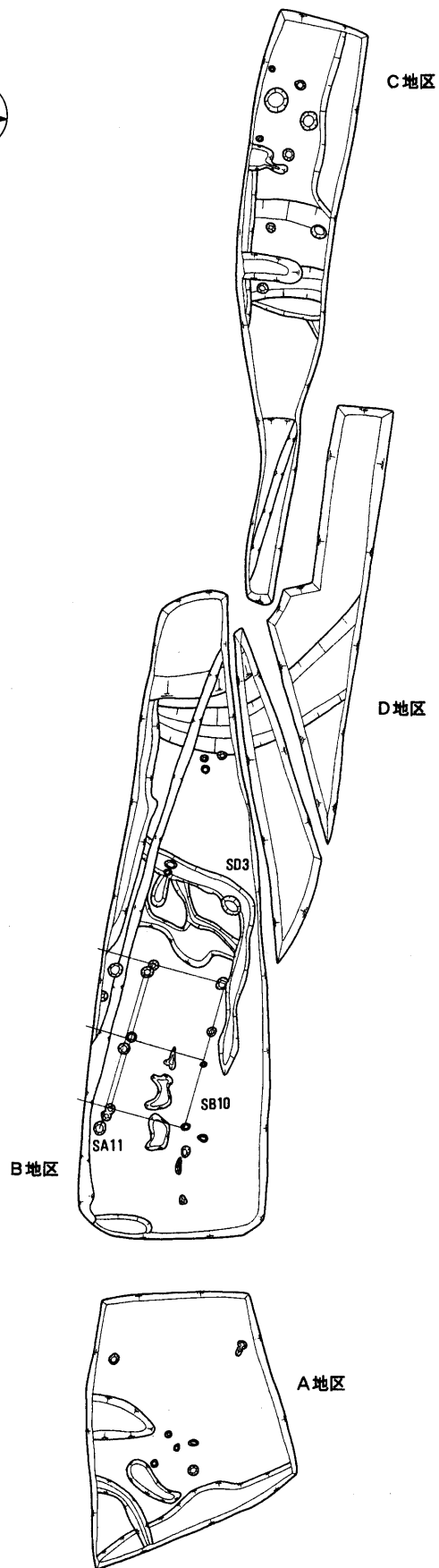
土師器皿(4) 復元した口径13.4cm、高さ2.0cmで、底部内外面はオサエが、口縁部内外面ともにヨコナデが施される。

土師器羽蓋(5) 口縁部が頸部で大きく屈曲して外反し、さらに口縁端部を内側へ折り込む。鏝は口縁の屈曲する外面から下4.0cmの部分に高さ1.8cm程度のものが貼りつけられる。内外面ともにナデが施される。

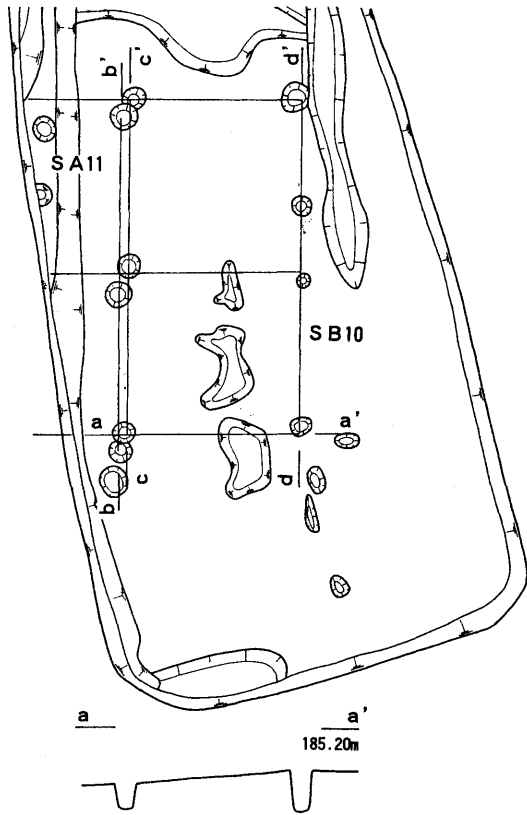
中出向26号墳出土遺物



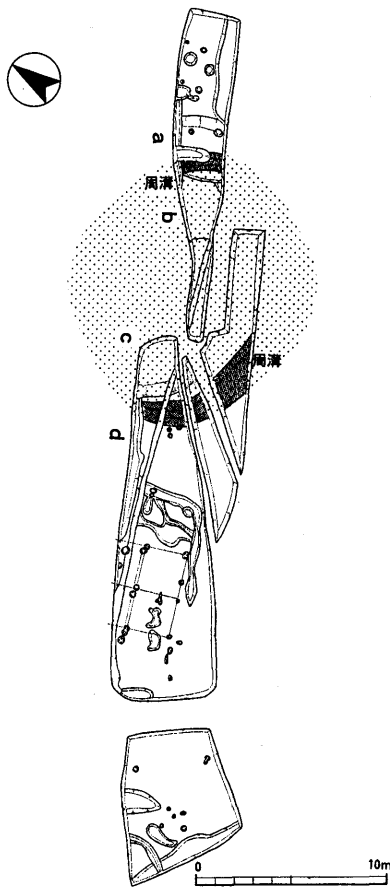
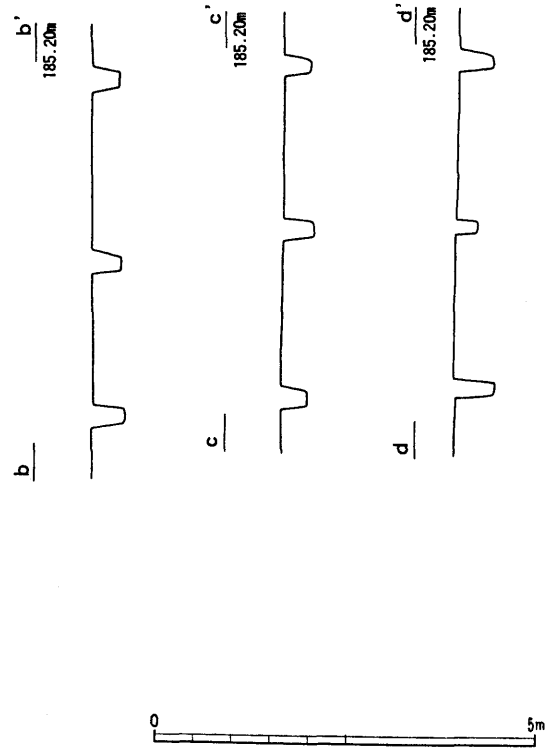
第14図 中出向遺跡 調査区位置図 1:1,000



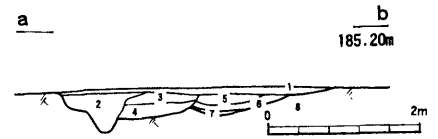
第 15 图 中出向遺跡 遺構平面図 1 : 200



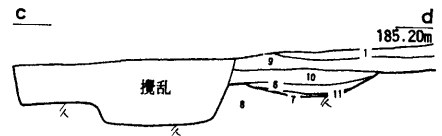
第16図 中出向遺跡SB10・SA11遺構実測図 1:100



第17図 中出向26号墳想定図 1:400



- 1: 茶褐色土 2: 暗茶褐色土
- 3: 暗褐色土 4: 黒褐色土
- 5: 暗灰褐色土(周溝埋土)
- 6: 暗灰茶色土(周溝埋土)
- 7: 暗黄褐色土(周溝埋土)



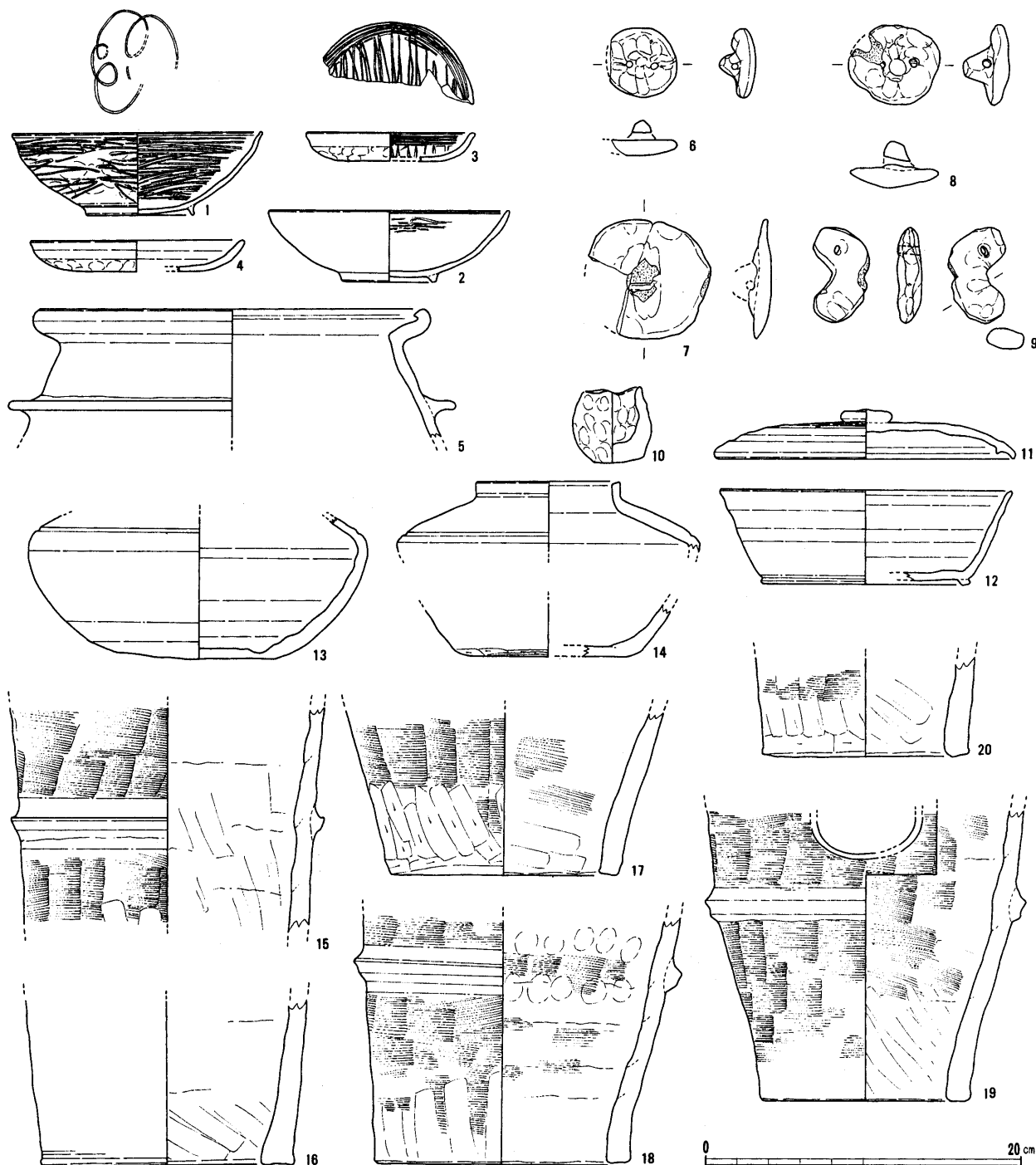
- 8: 黄褐色土 9: 灰茶褐色土
- 10: 灰茶褐色土に黄色土が粒子状に混入
- 11: 暗灰黄色(周溝埋土)

第18図 中出向26号墳周溝土層図 1:100

これらのものは、同古墳が削平された際、あるいはその後堆積された埋土から出土したものである。土製模造品(6~9) いずれも周溝埋土上層部の堆積土から出土したもので、鏡形(6~8)のものが3点、勾玉形(9)のものが1点ある。鏡形は3点とも平面形は楕円形で鏡面は凸形、鏡部の厚さは1.0cm前後である。残存部分からわかる径は、6が4.5~4.8cm、7が7.4~8.2cm、8は5.0~5.6cmである。6と8に

は半球状の鈕を貼付け、串状の工具で径0.5cm程度の穴を貫通させる、7にも鈕を貼付けた後穴を穿った痕跡が認められる。鏡面から鈕頂部までの高さは、6が2.4cm、8が3.0cmである。勾玉形(9)は幅2.4cm程度、厚さ1.6cm程度で勾玉状にカーブを持たせるもので、最大径は6.0cmである。上部に径0.6~0.4cmの楕円形状の穴を貫通させている。

ミニチア土器(10) 口径3.7~4.1cm、高さ4.8cm



第19図 中出向遺跡・中出向26号墳出土遺物実測図 1:4

程度のものである。

須恵器杯(11・12) 杯蓋は径18.6cm、高さ3.1cmで、宝珠つまみが貼りつけられている。内面にはかえりを有す。杯身は口縁部が直線的に外方向にのびるもので、底部の縁辺部に高台が貼りつけられる。内外面ともに回転ナデが施される。

須恵器壺(13・14) 13は体部が底部から緩やかに外向し最大径部分から内湾するもので、最大径部分上方約1.0cmに1条の沈線が巡る。14は、体部が底部から直線的に外向にのび、最大径部分で屈曲して内向するもので、口縁部は上方へ直行するものである。復元からの推定で、口縁は径9.0cm、体部最大径は19.2cm、底部は径10.0cmである。最大径部分上方約0.6cmに1条の沈線が巡る。

円筒埴輪(15~20) いずれも26号墳周溝想定部分の埋土より出土した円筒埴輪で、破片のみの出土であるため段構成は不明。いずれも黒斑は認められない。15以外は底部の出土で、復元した底部の径は19・20が13.0cm前後、16~18は16.0cm前後の2種類がある。15・18・19には貼付の凸帯が遺存し、

復元した最大径は20.0cm程度である。また、摩滅の激しい16以外には、外面にB種ヨコハケが認められ、17~20ではB種ヨコハケが外面最下段にも施される。内面は15・20はケズリ、17~19はヨコハケがみとめられる。19には楕円形のすかしが認められる。18の最下段は、底部と凸帯中央までの長さが12.0cm、同じく19は12.4cmである。6世紀初頭頃のものと思われる。

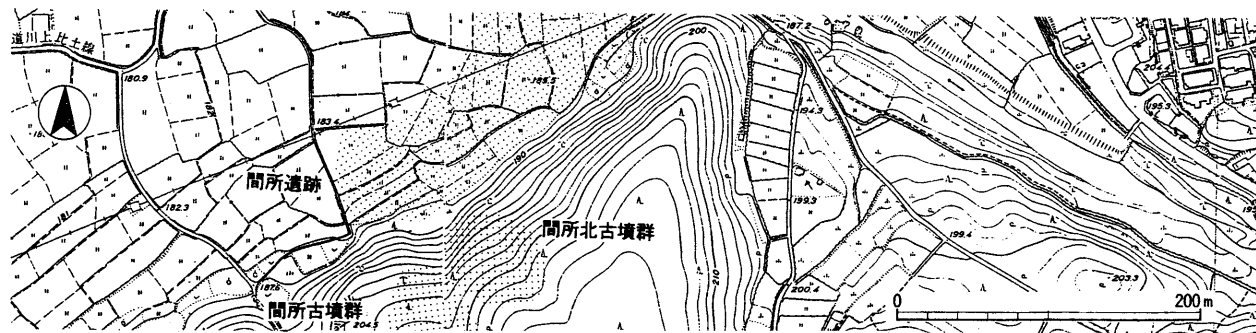
(3)まとめ

今回確認した中出向26号墳は、奈良時代以前に削平されたと思われる、周溝の埋土上層部には奈良時代の包含層が認められた、今回出土した土製模造品類は同包含層出土のものである。したがって、これら祭祀用具である土製模造品が古墳築造時の祭祀に伴うものではなく、古墳が削平された後この地点で実施された祭祀の際使用されたこととなる。あるいは、墳墓を破壊する時に何らかの祭祀が実施され、それに関連したものかもしれない。

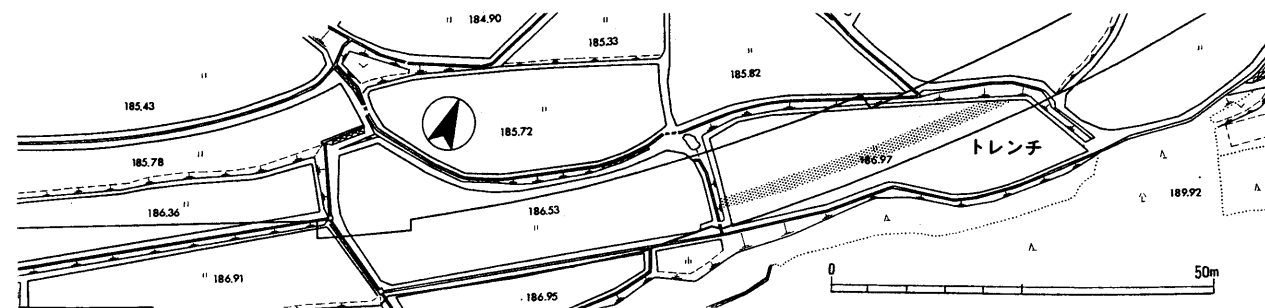
4 間所遺跡

今回調査地点は中出向遺跡調査地点から北東約200mの丘陵裾部である。長さ30m、幅1.8mのトレンチを設定し調査を実施したところ、今回調査地点

は全面に、かつて沼状の湿地部分であったと考えられるもので、遺構・遺物とも確認できなかった。今回調査部分は遺跡の縁辺部である。(筒井)



第20図 間所遺跡 遺跡地形図 1:5,000



第21図 間所遺跡 トレンチ設定図 1:1,000



西山遺跡 調査前風景 南から



西山遺跡 調査区全景 南から



西山遺跡 調査区西部 南から



西山遺跡 調査区東部 南から



中出向遺跡 調査前風景 北から



中出向遺跡 調査区全景 東から

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいほちねんどけんえいのうぎょうきばんせいびじぎょうちいきまいぞうぶんかざいはく つちょうさほうこくしょ							
書名	平成八年度県営農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	146-5・6・8							
編著者名	前川嘉宏・西村美幸・越賀弘幸・木野本和之・筒井正明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川 503 Tel 0596 (52) 1732							
発行年月日	西暦1997年 3月 30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
登り遺跡	度会郡度会町 火打石	24470	—	34度 22分 53秒	136度 36分 01秒	19961203 ～ 19961226	600 m ²	県営中山間地域 総合整備事業 (小川郷上地区)
野田遺跡	度会郡度会町 長原	24470	—	34度 25分 36秒	136度 34分 41秒	19961015 ～ 19961126	1,000 m ²	県営ほ場整備事 業(中川地区)
研山遺跡	度会郡度会町 長原	24470	—	34度 25分 33秒	136度 34分 28秒	19961015 ～ 19961126	1,000 m ²	県営ほ場整備事 業(中川地区)
西山遺跡	名賀郡青山町 西山	24501	—	34度 39分 18秒	136度 10分 02秒	19961105 ～ 19961209	740 m ²	県営ほ場整備事 業(羽根地区)
間所遺跡	名賀郡青山町 間所	24501	240	34度 39分 24秒	136度 20分 28秒	19961203 ～ 19961227	60 m ²	県営ほ場整備事 業(羽根地区)
中出向遺跡	名賀郡青山町 中出向	24501	242	34度 39分 21秒	136度 10分 26秒	19961203 ～ 19961227	250 m ²	県営ほ場整備事 業(羽根地区)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
登り遺跡	集落跡	近世		掘立柱建物、井戸		土師器・陶器		16世紀末ごろの 集落
野田遺跡	集落跡	平安～近世		掘立柱建物、溝		土師器・陶器		中世末期の集落
研山遺跡	集落跡	平安～近世		土坑・柱列		土師器・陶器		中世末期の集落
西山遺跡	集落跡	平安		掘立柱建物、土坑		土師器・瓦器		10世紀の集落跡
間所遺跡	集落跡	中世				土師器・瓦器		遺跡の縁辺部
中出向遺跡	古墳・集落跡	古墳・中世		古墳周溝、掘立柱建 物、土坑		土師器・瓦器		古墳・中世の集 落

平成9(1997)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告146-5・6・8

平成八年度県営農業基盤整備事業地域
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
